

# 聖王女と半身の魔王

スイス政府

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖王国編もつとみたかったな…

注意

聖王国を舞台にしています。

12、13巻の情報が乗っているのでネタバレ注意。

話によって時系列がバラバラです。推理して読んでみてください（丸投げ）

感想機能知らなかったんですが、感想があると嬉しいと知りました（小並感）

# 目次

騎士と王女の日常	①おこた	1
騎士と王女の日常	②例の決闘	8
メトロノーム1／2		15
メトロノーム2／2		50
ホーブランド		74
騎士と王女の日常	③オセロ	109
街		120
騎士と姫の日常	④新春野球大会	134



# 騎士と王女の日常 ①おこた

聖王国の王城。この巨大な建物の一角に設置された部屋。大して広くもなく、王城の部屋にしては無機質で飾り気は全くない。むしろ、山のように積まれた書類は景観を壊し情緒は皆無だ。ここは聖王国の会議室。日夜、官僚や各機関の長達が激しく議論を戦わせる場だ。

そんな、部屋に人影がちらほら。

彼らは非常に長い会議にも顔色一つ変えず、決して広くはない円卓を囲みながらあでもない、こうでもないと言葉を交わす。決して広くはない円卓を囲みながらあでもない、こうでもないと言葉を交わす。

彼らは非常に無機質なこの部屋に溶け込んでいるため、この光景は永遠に終わることなく続くようにも感じられる。

しかし、出席者の一人の女性がその変化しない風景を変化させる。

「はい。それでは本日の会議は終了します。皆さん最近、冷え込んできているので十分温かくして体調は整えてくださいね」

書類をまとめながら、会議の終了を告げたのはこの国のトップ。聖王女カルカ・ベサーレスである。冬に入り乾燥が進む時期だが彼女の肌には潤いが満ちている。日ご

ろから国を挙げて行っているアンチエイジングの賜物だろうか？

そんな失礼なことを本人に言おうものなら会議に出席はしていない彼女の側近の姉の方になで斬りにされる未来は見えているので、そんな生き急ぐものはそうそういない。

「カルカ様、注意勧告が完全に身内のそれですよ。この会議には敵対派閥の貴族などはいないのでそこまで気を張らなくてもいいですけど……気を抜きすぎでは？」

カルカの緊張感のない注意に軽いツツコミをいれたのは、側近の妹の方。ケラルト・カストディオである。最高神官長にして頭の回転も早いためこうした国の運営会議の一員として出席することは少なくない。悪いことを考えてそうと言われて育つたためか、それとも最初からそういう性根だったのか、悪そうな顔で悪いことを考えるのが得意だったりする。

「さっきの注意は確かに軽いですが、カルカ様は凜としてらっしゃいますよ。我々もカルカ様が王として振舞われているのを見てこそ、仕事に集中できるといふものです」「ほら、ジャレドもそう言っているんだから大丈夫ですよ。ケラルト」

参加者の文官のフォローに全力でのつかかるカルカ。ケラルトもカルカに対して本気で不満があるわけではないので。自然と会話が終了し各自解散する。

公務が終了したカルカも自室に戻らず、自室の3つ隣の部屋のノブを回す。

室内には大きな鏡。カルカはそこに躊躇なく入り込む。

鏡の中には、8畳ほどの和室のような空間が広がっていた。ただ、和室といっても茶室のような厳かなものではなく、生活感が前面に溢れた部屋だ。

鏡を抜けたカルカの目の前には薄型の黒い箱。映像が絶えず流れる魔法道具なのが仕組みは分かっている。持ち主も仕組みは知らないと言っていたのだから、尚更カルカが知る由もない。そしてこたつ。

ちやんと、卓上にはみかんも置いてある由緒正しいあのこたつである。

「うゝ寒い寒い」

カルカは手をこすり合わせながらこたつに潜り込む。かたつむりのようなならしな体制にだが、ここに臣下が来ることはないので問題ない。

床に敷かれた畳の感触を楽しみながら温まると睡魔が襲ってくる。うとうとしかけながられば何を何も考えずに眺めておく。

少し時間がたって、鏡とは反対側にあるドアが開く。

「…っっておお！来てたのか」

「ごきげんよう。先に温まっていますよ」

入ってきたのは、黒の全身鎧を装着した偉丈夫。

こたつに寝転ぶお姫様も違和感が凄いが、黒の全身鎧は合成画像のような、異様な不

自然さをもよおしていた

「一応、この部屋は緊急避難用ということで設置したんだが？」

「知っていますよ。でもモモンがこんなに充実した設備を設置してるんだから、こちらでくつろぐのも悪くはないわねと思ってきたのよ」

「これは、全部カルカの要望で設置したんだが、まさか忘れたのか？」

モモンが呆れたとジェスチャーを挟む。

「まさか。私ははつきりちゃんと自分が要望を出したのは忘れていませんよ。でも設置したのはモモンでしょ」

「まったく、ああ言えばこう言うんだな。まいったよ降参だ。さて、俺も温まるか」

モモンが甲冑のままこたつに入る。普通なら「いや、お前その鬱陶しい鎧脱げよ」とツツコミが飛んでくるが、カルカは当たり前と言わんが如くこれをスルー。モモンもべつにボケたわけではないので、そのままてれびを眺める。

「…」

「…」

「そういえば、今日会議でまた南の貴族が私の悪評を流しているらしいって議題に上がったんですけど、どう思う？」

「またか。言いたい奴には言わせておけばいいんだ。カルカが善政を敷いていることを



あつちも理解しているから、政治面ではなくプライベートを攻撃してくるんだよ。負け犬の遠吠えと軽く聞き流すのが良い」

「そうね。でもストレスはたまるわよ。あまりいい気持ちはしないし、実際事実だから否定もできないし。」

「そうか、王様も大変なんだな。私のイメージでは毎日好きな事して、美味しいもの食べてるイメージだけでも」

「そんなわけないじゃない。それとも、モモンの国での王様はそうだったの？」

「…私の国というよりも、私のもう一つ故郷というべきところではそうだったな。少数の上級国民が大半の民を食い物にしているといった感じだったが」

「同じ、国を統べるものとして軽蔑しますね。王は民を慈しむものでしょうに」

「まあ、あの国は資源が圧倒的に少なくなつてそうならざるを得なかったというのもあるが…まあ、最低な国だったな…」

「私から始めたけれど、あんまりしんみりした話はやめましょう。疲れてしまふし。…そういうえばモモン！あれはないのですか？私、非常に例のあれが飲みたいです」

「…いや、まああるけど。ほどほどにな？明日も早いんだろ？」

モモンは空間に手をつ込みそこから瓶とグラスを出し、テーブルの上に並べる。

「しかし、高級なお酒なんていくらでも飲めるだろうに。こんな安い麦酒なんかが好

きつてどうなんだ？」

カルカはモモンの質問に答える前に慣れた手つきで、瓶を蓋をあけグラスに中身を音を立て、注ぐ。

そして、膨張する泡が淵にたどり着いたのを見計らい、間髪いれず飲み干す。

「ぶはあ!!だって、麦酒ってこんなに冷やすだけで味が変わるなんて思いもしなかったもの。全然、こつちのほうがおいしいと思うわ」

「その年で、ビールが至高って、あなた疲れてるのよ…。まあ、ゆっくりお休みになりなさい。」

「あれ?どこかに出かけるの?」

「ああ、今日は週に一度のオルランドとの決闘の日だからな」

「あら、こんなに寒いのに大変ね」

「まあ、最初はいやいやだったのが慣れてくると結構楽しいもんだぞ。実際、剣の腕はこの決闘で上がっていつてるしな」

「そうなの。だったら、頑張ってきてくださいね」

カルカは欠伸をしなが面倒くさそうに見送る。

「そうだな、特訓と思つてやってこよう。…それよりも帰る時はこたつのスイッチは消してくれよ火事の原因になるからな」

モモンは最終確認とばかりにカルカに言い聞かし、部屋を出る

またしても、少し前と同じように部屋にカルカだけになる。寝ていた姿勢を仰向けにして天井をぼうつと見つめる。

「…私とモモンの時間を邪魔したカンパニーの班長は減給ですかね。…まあ、冗談ですけど」

誰もいないことは確定の部屋で、一人で愚痴る。

不満の声は誰に拾われることもなく、ただ天井に吸い込まれていった。

## 騎士と王女の日常 ②例の決闘

首都ホバンス郊外に古びた道場がある。元々の主が引退し、取り壊そうとしていたものがある人物が買い取ったことにより、未だに立ち続けているものだ。

道場自身は所々に穴が開き、それが修理された様子もない。それを風流といつて楽しめる人物は、そうそういないだろう。控えめに言つて廃墟のような見目をしている。

そんな、生きた人間の気配がしない建物であるが中庭は違う。こちらは道場本体とは打つて変わつて、非常にきれいに整備されている。草を刈り取った跡はまだ新しいものだし、砂利なども丁寧に排除されている。

そして、その場所には無数の屈強な男達の目線が向かう。素行の悪そうな外見に似合わず、背筋を伸ばし、だれ一人無駄口を叩かない。彼らの目線が向かう先にはこれまた2人の偉丈夫。

一人は、両手にグレードソードを装備した全身鎧。彼一人で100人の兵士すら相手にできるそういつた見た目、気配を感じる。そして、相対するもう一人も重戦士。しかし、こちらは全身鎧ではなく何枚も魔獣の革を重ねた重装革鎧と防御面では軽さを感じる。しかし、特筆すべきなのはその腰に幾本にもかかった剣だろう。この特殊な装備で

全身鎧にも負けない圧迫感を受ける。

「あー、今日は久しぶりに『背中をつけたほうの勝ち』が対戦内容でいいか?」

「いやいや、旦那。それは2週前にやったばかりかでしょう?全然、覚えてないじゃないですか」

「あれ…そうだったかな?この年になると物事がおぼえにくくてな…」

「いや、旦那何歳なんすか?数えが人間と違うからそれがボケなんか本気なんか正直、微妙なんすよね」

「まあ、ボケってことにしといてくれ。…それならお前的には対戦内容の希望があるのか?」

「そうですね…あれ!あれがいいです旦那!『異種武器対戦』!」

「あー、あったなそれ。よく覚えてるな」

「旦那と違ってまだまだ若いもんでね」

「いや、お前招集とか会議の時にたまに忘れてすつぽかすよな!?!戦闘に関しての記憶力だけだろ!お前の場合!」

「いや、あいつら、弱いくせに俺に命令するんでイライラつくんですよ。イライラは早く忘れた方が健康にいいでしょ?」

「たく、そのスタンス出会った頃から変わらん…あの時の俺も遊軍隊長に任命された

初日に同業者に決闘を挑まれるとは夢にも思わなかったよ」

「いや、旦那が上司で良かったですよ。おかげでイライラする軟弱な貴族どもの顔を見ないで済む」

道場の縁側からくじの入った正方形の箱を一人の男が走って持ってくる。

二人はそれを視線で確認すると、会話を止め、走ってくる男に体を向ける。

「ほいほい、ごくろうさん。どれどれ…俺の武器はなんじやらい！」

「行動一つ一つが賑やかなやつだな…パベルさんから静かさを分けて貰ったらどうだ？」

二人はくじを慣れた手つきで引き、なかに書かれた内容を確認する。その様子は学生の席替えの様に微笑ましい光景にも映る。

「ん…と俺は『アックス』！まあまあ、悪くないなモモンの旦那は？」

「俺は『両手短剣』だ。リーチ短めなのはあまり得意ではないが…まあ、練習と考えよう」

話している内容に微笑ましさは皆無だが。

「よーし！今回の勝負はアックスvs両手短剣だ！！いつも通り致命傷以外なら何でもok！膝をつかせたら勝ち！！お前から見届け人よろしく頼むぜ！！」

オルランドの宣言に会場が沸き立つ

5 mほどの円形内でモモンとオルランドが向き合う。

「しかし、ギャラリーが年々増えていつている気がするんだが？」

「まあまあ、いいじゃないですか旦那。あいつらがいるおかげでふざけた貴族の密偵が入り込めないようになってんすから。大目に見ましようよ」

「まあ、俺たちの訓練で隊員の士気、練度が上がることはいいことだ。」

和やかに会話をしている両者に構わず開始の印の旗が上がる。

先に動いたのはモモン。短剣の短いリーチを考えれば距離を詰めるのは最適解だが、一流相手に基本だけでは通用しない。

「甘い!!」

オルランドは両手でもっていたアックスの持ち手を向かってくるモモンに合わせて突き出す。槍のような動きで押し出された木材部分とモモンのヘルムが衝突し、大音量の金属音が響く。常人ならこれだけの衝突を起こせば首の骨が折れるだろう。そうでもなくても頭蓋骨が無事で済むとは考えにくい。

しかし、モモンも常人ではない。聖王国の遊軍隊長という地位に属し、数多くの遠征でアペリオン丘陵の亜人と剣を交えているのだ。これくらいは攻撃に数えられないという動きでオルランドとの距離を詰める。

手数こそ力と言わんばかりの速さで両手短剣をモモンが振るう。オルランドもモモ

ンの猛打を斧で受け流すが、流石に分が悪い。何回かは皮膚より下に攻撃が入っている。

「ふん!!」

斧を大振りにして、一旦強制的にモモンを遠ざける。

「相変わらず、化け物みたいな頑丈さですな…」

「そこだけがとりえなんですね。まあ、昔よりは技術も身についてはきたが!!」

モモンが踏み込み距離を詰める。突き出された短剣は空を切る。

(まづい!!)

モモンの右手は伸び切った状態で、今上から力を加えられると抗うのが難しい。敗北条件がひぎをつかせるなのだからこの状態は非常にまづい。

この好機に勿論オルランドは斧を上段から振り下ろす。

しかし、モモンは腐ってもプレイヤー。現地人離れた身体能力の持ち主である。

この体制から上半身の姿勢を180度変換し、オルランドの斧を短剣で受け止める。

「なっ!!?」

オルランドの驚愕と観客の驚愕がシンクロし、妙な空気が発生する。

が、オルランドは戦闘になると非常に冷静クレバーである。普段の適当さがなりを潜め、歴戦の武人としてすぐに状況に対応してくる。



打ち込んだ斧の上から拳をぶつけたのだ。

「あつ」

モモンが力ない声とともに体制を崩す。崩れた下半身は土に付き、汚れた膝当てが勝敗を表す。

「そこまで!!今回の試合はオルランド・カンパノ班長閣下の勝利です!!」

万来の拍手が起こり、静かだった観客が沸き立つ。

「いや〜今回は俺の勝ち!!最近勝ててなかったから嬉しいねえ」

オルランドが倒れたモモンを引き起こすために右手を差し出して清々しく言う。

「ああ〜油断したなあ。やはり、パワーが生かしづらい武器はまだまだ鍛錬が必要だな」  
こちらにも純粋に勝敗を分析していながら、オルランドの手をとり立ち上がる。そこから、勝った相手への苛立ちや羨望はなく負けたことへの悔しさのみを見ることが出来る。

「いやいや、最初のころに比べたらとんでもない進歩ですよ。種族の特性上、戦い方で剣技を習う必要がなかったんですかい?」

「だから…あれは魔王のせいだっけ? いったらどう? だいぶ前だったが…確かこの試合を始めたころだったから、5年前くらいか?」

「へえ、そんな理由でしたかい。いや、いけないね年を取ると物事が覚えにくくてね」

「お前、自分でまだまだ若いつて言ってたよな？」

「すいませんね。戦闘以外のことは忘れてしまうもので」

「お前：流石に上司としてその性根は直しとかなないと後々に厄介になりそうだ。気が変わった：明日の任務に支障が出ない程度に徐々に長時間耐久の試合でもするか」

「あちゃーこいつはひどい罰だ。」

オルランドが言葉の内容とは似合わない猛獣の様な笑顔を浮かべる。

本心を隠す気がないのか。隠せないのか分かりにくい男である。

「戦闘狂だなあ。流石にドン引きだわ：出会った当時からドン引きしてるけど、何年たつても未だに慣れない程度にはドン引きだわ」

「まあまあ、旦那あんたも好きでしょ？」

「なんか、俺もお前と同類みたいに話が続いてるけど俺は100%お前よりではないぞ。あと、言い方気持ち悪いな」

「気持ち悪いはひどいですよ旦那。まあ、無駄話は後にして早くやりましょうよ」

「罰のはずなんだけどなあ…」

古ぼけた道場の中庭の騒ぎはまだまだ収まる気配はない。

## メトロノーム1/2

部屋の窓がガタガタと音を立てる。この部屋の窓は大抵のことでは、微動だにしないので外はよっぽど荒れているのだろう。雨の音が室内まで響く。この激しさからしてこの後もしばらくは止むことはないということとは安易に予想できるほどだ。

これほど激しい雨音を聞いていると、あの日を思い出す。

部屋の主であるこの国で最も高貴な女は、目を閉じて記憶を鮮明にしていた。

聖王というこの国で最も高貴な身分の男は、目の前の自分の娘を視界から外す様を下を向く。その姿からは王という絶対的な権威は感じられない。子供のわがままに困り果てた父親の姿であった。

困ったということは言葉にせず、自らの癖のない金髪をごしごしと乱暴に揉むことで目の前の小さき提案者に抗議を行う。

「カルカ：確かに優しきお前なら傷ついた国民の心を癒すことはできるだろう。しかし、今は時期が悪い」

数日前、聖王国は「壁」が建設されて以降、最大の事件に巻き込まれていた。亜人ス

ラーシユの侵攻である。スラーシユは、その亜人らしい人間にはない優れた能力——高い城壁だろうともものもしない吸盤のついた手を用いて侵入してきたのだ。

しかし、普段であればここまで侵略を許すことはなかっただろう。制度、練度と共に人間国家としては随一の硬さをもっているのが聖王国という国なのだ。普段であれば一匹の侵入を許す前に、弓の達人や猛き剣士が彼らを殲滅していたことだろう。

——そう、普段であれば”

「雨は未だに長く降り続いている。今回のスラーシユの侵攻を許してしまった原因の雨だ。確かに第一陣とみられるスラーシユの群れは撃退したが：奴らは隠密にすぐれた種族。未だにどこに隠れているかわかったものではないんだよ」

「ですから、民は毎日不安で夜もちゃんと寝れてないと思うんです。そんな方たちを勇氣づけたいんですお父様！」

くたびれた様に説得する聖王と対照的に元気よく返答するカルカ。その慈愛の心により一層輝いて見えるカルカに聖王である父はますます、困り果てた。

実は、カルカを襲撃にあつた村々に派遣するのはそれほど悪い手ではない。

スラーシユという種族は上位種になれば〈溶け込み〉の魔法すら使えるほど、隠密に優れた亜人だ。そんな亜人だからこそ、民衆の中には目立たないだけでまだスラーシユが潜んでいるのでは？という疑念は晴れていない。

そんな、スラーシユ撃退の報に疑念を持つている村に王族であるカルカが来訪するというのはどういうことか。

“あなた方の村は王族が訪れても支障がないほど安全である”  
という証明になるのだ。

言葉で説得することは無理であろう村人たちも安心できるだろう。

さらにもう一つのメリットとして南側へのアピールにもなる。

聖王国は、国土を海で二分にしている為に南部と北部には微妙なパワーバランスが出来上がってしまっている。聖王の権力が及びやすい北部と比較的、貴族が幅を利かせている南部だ。

今回のスラーシユ侵攻は、被害にあった村の位置から北部側の城壁が主な侵攻ルートとして考えられている。先日開かれた対策会議では、このことを南部の大貴族たちは激しく糾弾した。

曰く、先人が血と汗で築き上げた聖王国を汚した。曰く、大雨への対策をぬかった王には慢心が見える。

確かに大雨への対策が不十分であったことは王も認められる。しかし、歴史的大雨と言われた今回の雨は国内各所で水害を起こしており、外だけに注意を集中するのは困難であったのだ。

大貴族も馬鹿ではない。そこには気づいているだろう。この糾弾は聖王として盤石過ぎる地盤を築いている現聖王への牽制に他ならない。

大貴族の言いがかりがヒートアップし、これから佳境に入るのであるところまで会議参加者の一人である紫を戴くご老が止めたことで一応の収束をみた。

会議中、唾を飛ばし激しくこちらを糾弾した貴族も聖王のお気に入りであるカルカを村々に派遣したと聞けば、多少溜飲を下げるだろう

(確かにメリットは大きい…しかし、もし、もし万が一の可能性があるのであれば…)

カルカは聖王国王族という高貴な血を持っている一族の基準で見ても圧倒的に優れている。

齢十一にして信仰系魔法を第二位階まで操る―教育係によると第三位階にも足をかけているらしい魔法の才能。良く回る頭。民を慮る慈愛。そして、ローブル至宝と呼ばれるその美貌…

聖王である自分も頭の出来や立ち振る舞いには多少自身があるが、その自分から見てもカルカは王として素質を高く持っている。自分の次の王位を継がせたいくらいには。

(だが、カルカは次期聖王になる可能性は低い…か。なら今回はメリットを取るべきか…?)

カルカは圧倒的才能を有するが、王位継承権は低い。単純にカルカが女であるから

だ。

聖王は自分を含め、今まで男系が務めてきた。カルカの上の兄がまだ存命の状況で、兄らを押しつけてカルカが聖王になる可能性は極めて低い。

もし、カルカが聖王になるものなら前回の会議でこちらを糾弾した貴族は勿論、多くの貴族が不平を募らせるだろう。——なら

(いや……違うな……)

メリットとデメリットを天秤にかけている途中で聖王である男は、考えを改める。

自分の、最も可愛がつている娘の命を危険に晒してまで「メリット」を取ることを考慮していた自分に嫌気がさしたからだ。大きく息を、長く吐く。父のその行動にカルカは可愛らしく、小首を傾げていたため、何でもないと声を掛ける。

王として娘の危険を覚悟してでも、メリットをとるか。娘を愛す父として行動し、王としての自分を後に回すか。そこまで考え、男は可愛らしく自分の言葉を待っている少女に答えを返した。

：

「そこで私が護衛長に抜擢されたということですか。」

ゆつたりとした馬車で姿勢を正しながら、男は納得の声をあげた。

男はグスタヴス・モンタニエス。聖王国聖騎士団団長を一昨年まで務めていた手練れ

である。

今では後進の育成に当たっていたのだが、今回はカルカの使節団における護衛のリーダーとしてカルカと馬車に同乗している。

「しかし、王族の方が乗られる馬車というのは相変わらず豪奢ですな。国民に心の安寧を与えるために必要な演出とは言え、多少緊張してしまいます」

白髪が混じった頭を掻きながら、居心地悪そうにグスダヴスが言う。彼は疲れたような垂れ目である為、文面以上に気まずそうな雰囲気であるが、何度か王族の護衛をしている彼はこの豪華な馬車も慣れたものはずだ。

単純に会話のとっかかりということだろう。しかし、話題の提供をネガティブなものから始めるところにグスダヴスの本質が見えている気がして、少しカルカは微笑ましい気持ちになった。

「そうですね。今回の使節は私がスラーシユの被害にあった村々を回り安全をアピールすることが狙いです。ですので、大勢の護衛を引き連れているには説得力がありません。少数ですが精鋭の方々に護衛をお願いしたのです。」

今回、カルカの使節団の構成メンバーはカルカを除き9人。カルカの身の回りを世話するメイドが3人、馬車2台の運転手兼レンジャーが2人、グスダヴスを含む護衛が4人だ。



メイド三人と護衛である聖騎士一人は後方の馬車に、前方の馬車はカルカとグスタヴスと聖騎士が2人という構成になっている。

少数精鋭というだけあって、グスタヴス以外の聖騎士もなかなかのエリートである。最低でも難度50のモンスターと一騎打ちすら可能である。

しかし、そんな護衛のメンバーに明らかに場違いな見た目の人物が一人：

「zzzz…」

「あのー、彼女の護衛の方なんでしょう？護衛方たちの選別はお父様が行われるという事だったので…」

カルカが口ごもるのも仕方がない。なぜなら護衛としてカルカの目の前にいる少女は…そう少女は、精鋭の護衛と言うにはあまりに頼りない恰幅だ。

一応、聖騎士としての身分を表す鎧を装着しているが、年の頃はカルカと同じくらいにしか見えない。この年頃の従者やその見習いとして聖王国軍に従軍する者はいても、聖騎士として身分を得ているものなど、少なくともカルカは聞いたことはない。

よほどの実力の持ち主として抜擢されたのだろうか。しかし：

目の前で就寝中の彼女は、その見た目に合った可愛らしい寝息を立てながら涎を垂らしている。余程、幸福な夢を見ているのだろう。起きる気配は微塵も感じられない。

というか、なんで寝てるの？

「あー…申し訳ございません。さつきから何度も起こしているんですが…まさか、カルカ様とお話ししている少しの時間で寝入るとは…おい！起きろレメディオス!!」

グスダヴスがガントレットを装着した腕で寝入る護衛?の少女にゲンコツをお見舞いする。

頭と鉄の接触音の割には、鈍い音——形容するならゴォギーン!という音を馬車内に響かせ、少女が目を覚ます。

「あつ。寝てしまっていたのか!先生、流星にガントレットで拳骨は過剰暴力ですよ!」  
「お前なあ!王族の方の御前で爆睡するなよ!ほら、カルカ様に謝罪しろ!」

グスダヴスが無理やり、レメディオスという少女の頭を下げさせる。当のレメディオス別に反省していない訳ではないが、状況が呑み込めず頭を下げさせようとするグスダヴスの腕に反抗している。背筋を伸ばそうとする彼女にもう一度、グスダヴスがゲンコツをお見舞いする。

「いえ、お気になさらずに。グスダヴス様とレメディオスさん?でしたか?それよりもレメディオスさんは痛くないんですか?凄いい音になりましたけど」

別にカルカはレメディオスに腹を立ててもいらないので、謝罪をすぐに受け入れる。それよりも、自分と同じ年の頃の…しかも女の子と一緒に派遣されるとは思ってもいなかったの質問がしたいとウズウズしていた。

「痛いことは痛いですけど…私は強いので先生のゲンコツくらいではびくともしないですよ!!」

得意げに胸を張るレメディオスにもう一度、グスダヴスのゲンコツが落ちる。

「まずは、謝罪を受け入れてくださりありがとうございます”ごさいます” だろうが!!…やっぱり連れてくるには早すぎたか…」

普段から落ち着いているグスダヴスが珍しく、声を張り上げてレメディオスに注意する。

カルカはレメディオスの態度に対して何とも思っていないが、数いる王族の中にはこの態度を不敬とする人物は少なからず存在する。

王族の警護を数多くこなしてきたグスダヴスは非常に肝を冷やしているのだろう。

流石に不憫になったカルカはグスダヴスに助け舟を差し出す。

「えーと…レメディオスさん。私は別にかまいませんが、他のお兄様やお姉さまの前で寝てはダメよ?」

普段から”やさしい”と言われるカルカらしい言い回しでレメディオスを注意する。

流石に気を使わせてしまったことに気づいたのか、レメディオスは目を開き姿勢を正す。

「謝罪を受け入れてくださりありがとうございます”!!」

カルカは大きなため息を吐く。グスタヴスに心の中で合掌しながらもレメデイオスという少女に興味を惹かれていた。

この少女の（良く言えば）天然ぷりは、カルカ自身の印象としては非常に好感が持てる。

色々話をしてみた。きつとこちらが予想していた斜め上の回答を返すことは容易に想像できる。カルカは、どんなことをレメデイオスに聞こうかワクワクしていた。

…のだが

「…グスタヴス様。とりあえずカルカ様にレメデイオスが護衛に選出された経緯を説明した方がよろしいのでは？いきなり、レメデイオスの様なちんちくりんを護衛と説明されてカルカ様も戸惑っておられる御様子でしたし」

苦笑いを浮かべながら、茶髪を短く刈り込んだ青年が提案をする。

そう、まだレメデイオスは自己紹介すらしていないかったのだ。これだけ時間をかけて自己紹介すらしていないかった事実を認識しカルカは驚くが、それすらも面白くてつい笑いそうになってしまう。

ちなみにちんちくりんと言われたレメデイオスは、その聖騎士に抗議をしようとするが、流石にそれはグスタヴスが止める。

「そ、そうか、レメデイオスにペースを明らかにかき乱されているな…カルカ様、紹介が

遅れたことをお許しください。今回カルカ様の身辺警護を私、グスタヴスを隊長とした他部下三名で務めてさせていただきます。まずこちらが聖騎士アントニオ・サンチェスです。」

紹介されたアントニオが深々と頭を下げる。アントニオの態度は聖騎士が王族に向けるものとして一般的なものだ。しかし、レメディオスの前で行うと畏まりすぎている様にも見えるから不思議なものである。

「アントニオは、レンジャーとしても有能なので周囲の警戒を他二人のレンジャーと連携して担ってもらいます。勿論、聖騎士として剣の実力も折り紙つきです。あちらの馬車には聖騎士カシミロ・ガルレスが乗っています。カシミロは要人警護の実績が豊富なベテランでございます。そして…」

グスタヴスが目に力をいれて、カルカの左斜め前の人物に手を向ける。

「こちらがレメディオス・カストディオ。弱冠一七歳にして聖騎士に任命された剣の天才です。先程の様子をご覧になられたので、信じて頂けないでしょうが近年稀に見る逸材なのです…一応。万が一の敵襲発生時には率先して敵を叩く役割を担っています。」

「その年で正式に聖騎士に任命されたのですか!？」

カルカが驚くのも無理はない。聖騎士になるということは、困難なことではない。確かにそれなりの才能や国への忠誠心は必要だが、努力すれば…それなり以上の人間には

掴むことのできる地位だ。

しかし、それは時間を積みめばだ。聖騎士に就任する平均年齢は21歳。確か、カルカが記憶している中で最年少の就任者でも14歳であったと記憶している。

しかし、目の前のレメディオスは11歳だという。確かに逸材と呼ぶのにふさわしい者だ。

(ただ、頭の方はその剣の技量に比例していなかったということね…)

鼻が伸びている姿を幻視してしまいそうな様子のレメディオスを残念な子を見る視線で眺める。

「今回は、スラーシユの被害にあった国民の不安を払拭するという目的の元で壁付近の村々を回ることになっています。壁内なのでモンスターの襲撃の可能性は低いです。しかし依然として雨は降り続いており、スラーシユの残兵がいることも懸念されています。そのため、聖王様は比較的危険度の低い国内公務に護衛を厚くされました。」

グスタヴスが今回の公務の注意点や目的を確認する。流石に空気を読んだのかレメディオスも神妙な顔で説明を聞いている。

「まずは、被害が最も大きかったカタルニア村から訪問し順々に内部の村に進んでいきたいと考えています。何か質問などはあるでしょうか？」

「いいえ、大丈夫です。今回は私のワガママに付き合っていただいて皆様ありがとうございます。」

ざいます。私が村の人びとと触れあっている間の護衛よろしくお願いいたします。」

カルカが頭を下げる。まだ、子供とはいえカルカは王族。国のリーダーの一員としてそう簡単に頭を下げてはいけないこともある。

しかし、その真摯な態度が人の心を動かすことも勿論ある。

ひたすら、恐縮するグスタヴスやアントニオの返答を聞きながら気づかれないようにカルカはレメディオスを見る。

(あら、やっと興味をもってくれた)

先程までのレメディオスは、カルカを見ていなかった。

レメディオスがカルカを嫌っているわけではなく、単純に他人への興味が薄いのだろう。

特定のことにはしか興味をもてない人種というのは一定数存在するものだ。推測するにレメディオスは戦闘の関すること以外には興味があまり惹かれないタイプなのかもしれない。

そんな、レメディオスが初めてこちらに興味をもった。そんな気がした。

「改めて宜しくレメディオス。同い年同士仲良くしましょう。」

カルカは、手を笑顔で差し出した。レメディオスは少し戸惑った後、満面な笑みで握手を返した。

…

「ここが最後の村ですね。」

最後まで長雨が止むことはなかったが、当初に懸念されていたモンスター襲撃はなく、カルカとその一行の公務は最終日を向かえていた。

「村のたちが元気になつて良かったです。最初は不安でしたが無事に終われそうで安心しています」

「カルカ様！油断は禁物ですよ！四大神の残した言葉にふらぐを建てるといふものがあつて…どんな意味だったかは忘れましたが、そういうことを言うと言つて死んでしまうことがあるみたいですよ！」

「なにそれ怖いわね」

カルカとレメディオスはこの2-3日でスッキリ打ち解けた。今、思い返せば、誕生日が近いという話題から心の距離が近づいた気がする。カルカは思い返す。

そして、この少女予想以上にぶつ飛んでいる。自分は余り優秀な人間でないから、戦闘以外は極力考えないようにしていると本人も語っていた。しかし、そこまで後先考えないと日常生活にも支障がでるのでは？と感じるレベルだ。少なくとも頭の固い貴族や王族への受けは非常によくないだろう。

また、レメディオスには妹がいて、まだ9歳だが子供とは思えない悪知恵の持ち主で



あるらしい。こちらもとんでもない武勇伝が多く、今度一緒に話してみたいものだとかルカは考えていたりする。

「いや、そんなざつくりした意味ではなかっただろ…まあ、そういうことを言うのは縁起が悪いの意味でしたよ」

「私は、そう言っただろアントニオ。言い掛かりを付けるな」

「いや！全然違ってたからね！記憶力鳥以下か!?あと、アントニオさんな！」

「ほう…アントニオと私の主張は平行線。なら剣で決着をつけよう！」

「お前やっぱり、言い掛かりつけて組手したいだけかい。カルカ様の御前なんだから自重しろよ…」

「カルカ様見ててください！アントニオを綺麗に負かしますよ！」

「この馬鹿野郎！」

剣を構えていたレメディオスに背後からグスタヴスのゲンコツが飛ぶ。

「先生!?わ、私だけじゃないですよ！アントニオも剣を構えていて…あれ!」

「レメディオス…護衛として気合いをいれるのはいいけどほどほどにしるよな。グスタヴス様をあまり困らせるなよ♪♪」

やはり年の功。なに食わぬ顔で馬車周りの警戒作業に戻っていたアントニオのほうがレメディオスより上手であった。

(村の方々にも元気になってもらえたいし、おもしろい人達と交流も持てた…今回の公務は実りが多かったわね)

天気は生憎な空模様だったが、カルカの心は暖かい満足感で占められていた。

「それではカルカ様準備が整いましたのでこちらに来ていただけますか？」

グスタヴスの呼び掛けにカルカは元気良く返事をした。

…

「カルカ様ありがとうございます。ありがとうございます。あなた様に暖かい心使いをしていただけたお陰で本日は安心して眠れそうです。」

「いえ、礼には及びません。聖王国に住まう皆様の幸福が私のなりよりご幸福なのですから」

礼をいう村長へさらに慈愛の心を見せるカルカ。終始、よい雰囲気の中最後の村での公務は終了した。

…

「ふうー終わった！終わった！後は王城に帰るだけですわね！」

レメディオスが伸びをしながら、自身の緊張感を和らげる。アントニオも口にはしないがレメディオスと同様に気の張りを少し緩めているように思える。

「レメディオス、あと半日とは言えまだ任務は終わっていないぞ？それとアントニオ、周

りの警戒は重要だ。最後まで気を抜かないように」

流石は、元聖騎士団団長である。少しの部下の緩みを見抜き注意する。

アントニオはばつが悪そうな顔をして謝罪する。ちなみにレメディオスには変化はない。ある意味大したものである。

「すいません、グスタヴス様。これからは集中して…ん？」

「どうした？」

アントニオの人の良さそうな顔が変化し、鋭い騎士の顔になる。

「いえ…何か相当な重量のものが近づいている音が聞こえます。」

アントニオの言を聞き、各々耳を澄ませるが音は聞こえない。しかし、アントニオはレンジャーとしてもやり手の男。そんな男の意見を無視する選択肢は一行にはない。

アントニオに少し遅れて、外のレンジャーから異常発生の合図がなる。

この間、実に8秒。たった8秒で耳を澄ませても聞こえなかった音が喧しいと思えるほどの音量になる。

それはつまり…

「各自戦闘体型！配置は2番だ！カルカ様に万が一の事態が無いように気張れ！」

グスタヴスの指示と共に全員が馬車から飛び出す。

そして、全員が接近してきたものを視界に入れる。

「黒い全身鎧……？」

人間なのだろうか？黒の全身鎧を装着した偉丈夫がこちらにもものすごい速さで向かってくる。理由も正体も不明だが護衛のもの達のやることは、決まっている。

カルカの守りをグスタヴィスとカシミロが固め、レメディオスとアントニオが接近してくる全身鎧に武器を抜き、切りかかる。

漆黒の騎士は向かってくる二人を見て、体勢を建て直すためだろうか？勢いを殺し、どこに隠していたかは分からないがグレートソードでレメディオスとアントニオの攻撃を受け止める。

「貴様あ！何者だ！武器を捨てろ！」

アントニオは威嚇する。大抵の相手であれば怯むだろうが黒の戦士に変化は見られない。

雨音で聞き取りづらいが「急がないと」「邪魔だな」などの呟きが聞こえてくるだけである。

レメディオスが連撃を仕掛ける。目にも止まらぬ速さであり、正直アントニオでも全て捌ききるのは難しいと感じる攻撃だ。

それを黒の剣士は、最低限の動きで避ける。

(……いつ出来る……!!)

「グスタヴス様！カシミロさん！天使で援護をお願いしたい！」

本気で潰すべき。そう考えたアントニオの援軍要請に黒の騎士は焦ったのだろか。攻撃に転じはじめる。

(こいつ、剣技は大したことない?)

あれほど、見事な体さばきを見せた剣士にしては不自然だが剣は大降りで避けることは難しくはない。

しかし、異常に太刀筋が速い。

(こいつもしかすると亜人か!?)

高い身体能力で押してくる闘いかたは剣士というよりもモンスターにそれに近い。攻撃が当たらないからだろうか。黒の剣士の攻撃がより単調により大振りになっていく。

その攻撃をすり抜け、レメディオスとアントニオの攻撃がヒットする。しかし

(ちっ！無傷か?)

激しい金属の衝突音が発生するほどの攻撃だったのにも関わらず鎧は、多少の傷ものこらない。その事実が敵の着用している鎧の強度を情報としてアントニオ達に伝達する。アントニオやレメディオスの武器は聖王国が保有する武器のなかでも上から数えたほうが早いにも関わらずこの結果である。鎧の防御を突破するのは厳しい。

(だが、このままいけば勝てるだろう)

なにも、敵を切るだけが勝ち筋ではない。切れないなら撲殺すればよい。そこまできなくても鎧の下の生身にダメージは蓄積していくはずだ。まさか空っぽでもあるまい。

こちらは天使×2 + 剣士×2で攻撃し続けられる。あちらの攻撃は慎重に見極めれば当たらないのだから十分勝機はある。

アントニオの攻撃で生まれた隙をレメデイオスが突きダメージを与える。

やはり、レメデイオスの戦闘の才は別格だ。普段の思考にもこれくらいの真剣さがあるらしいものである。

「あーちよつと邪魔ですよ!!もう…どうしようかあ」

黒い剣士が困惑した様に大きな声を出す。思っていた以上に知性を感じさせる声色にアントニオは困惑するが、カルカが害される可能性があるのであればここで仕留めるべきだ。何よりこいつは怪しすぎる。

黒い剣士が突きを繰り出す。今までの大振りとは質の違う攻撃にタイミングがずれるが、何とかかわす。しかし、その剣はそこでは止まらなかった。力のかかっている方向にそのまま黒い剣士の腕から離れていったのだ。

(まさか!?)

反応するのも難しい速度でグレードソードが飛翔する。その先にはカルカ・ベサーレス。

まさしく、守りを固めるグスタウスとカシミロの間を縫うような一撃に護衛部隊の全員が青ざめる。

グサツ

剣が肉に突き刺さる音が鈍く鳴る。ローブルの至宝と呼ばれ輝しい将来が約束された少女の人生が幕をおろした。誰もがそう思った。

「えっ!?!」

驚愕の声を上げたのは自分だったのか、他の誰かだったかもしれない。グレードソードはカルカの1m前の空中で停止している。一瞬、アントニオを含めこの状況を理解できなかったが、すぐに答え行きつく。

空中で待機している剣の切っ先の部分から何も無い空間に色が付き始める。

「スラーシュ!!?!」

「間に合って良かった」

呆気にとられている一行は黒い剣士の接近の理由を悟る。だが、腑に落ちない。

謎の人物である黒の剣士の行動に対し、誰よりも立ち直りが早かったグスタウスが口を開く。

「えーと、助かりました。どうやらこのスラーシユは上位種だったようで。貴殿の尽力のおかげでなんとか被害を出さずに済みました。…ところでどうして事情を説明できなかったのです？こちらとしてもそうしていただければ…どうかされました？」

黒の剣士が周りをキョロキョロと見まわしながら、グスタウスやカルカのいる位置に歩を進める。全員一瞬にして構えるが、そんなことは眼中にないとばかりに、相変わらず何も無い空間に目線を飛ばす。黒の剣士がスラーシユに突き刺さった剣を引き抜くと剣を構え、全員に聞こえるであろう音量で声をだす。

「細かい説明はあとでします。端的に言うのと、この馬車は囲まれています。私が感知できただけでもこの化け物はあと6匹います。」

黒の剣士の説明に全員が驚愕する。特に周囲の警戒を任されたアントニオと二人のレンジャーの驚きは大きい。普段であれば、この言葉を信じなかっただろうアントニオも目の前のスラーシユの死体の説得力に反論ではなく疑問を返してしまう。

「どこにいる!?何故気づけなかったんだ!？」

「私の目の前の木の付近に3匹、馬車から50mくらいの後ろ側に三匹ずつです。後者の質問は後で反省会でも開いて検討してください。ほら、来ましたよ!」

黒の剣士は何もない空間に大剣を振り下ろす。するとスラーシユ特有の長い舌であろう部分が姿を現す。どうやら攻撃してきたところを黒の剣士が切断し振り返りにさ



れたのだろう。

基本的に〈溶け込み〉を看破するアイテムを移動中に護衛は使用していない。これは、護衛の任務が3日以上と長期にあたることに起因する。使用すれば、一時的に〈溶け込み〉を看破するというアイテムは存在するのだが効果時間はもって1時間。今回も比較的カルカに危険が及びやすい村々での交流時には、このアイテムは使用していたが襲撃を受けている現在には使用してはいなかった。

では、護衛の聖騎士たちはこの黒の剣士以外は棒立ちのままであったのか。そんなわけがない。彼らは聖王国軍事のエリート集団の一員であり、その中でもエリートもエリート。すぐに戦闘に移っていた。

カシミロが弓矢を構える。その弓矢はただの弓ではないのは鎌の代わりに装着された白い巾着袋を見れば明らかだ。弓は構えたまま、第一位階魔法で指に火を灯し矢を発射する。

発射先は何もない空間。否、先程黒の剣士に提示されたスラーシユの潜伏位置である。

その位置に着弾した矢から爆発が発生する。ただ、爆発は小火が発生する程度の威力でありダメージを与えるのが本命ではないのは察することができる。そして、爆発の煙にまかれた白い粉を被った存在が現れたことから、矢で小麦粉をまき散らし見えない敵

の可視化が目的であったとレメデイオスはここで悟る。

因みに他のメンツはその行動の意味を読んでいた。多くの亜人と対峙する聖騎士に対スラーシュ対策の基本は、頭に叩き込まれているからだ。アントニオはすでに攻撃に移っていて、アントニオの行動を見たグスタウスとカシミロは天使でアントニオを補佐しつつ、守りを固めようと動く。

「〈警報〉〈第2位階天使召喚〉〈第2位階天使召喚〉〈第2位階天使召喚〉〈第2位階天使召喚〉〈第2位階天使召喚〉…すまんがカシミロに攻撃の補佐は任せるぞ。こちらは守りを固める」

今度是不覚を取るまいと、探知系の魔法をカルカの周りで発動させつつ、召喚した複数体の守護の天使で守りを固めるグスタウス。

「承知しましたグスタウス隊長!!私はこの黒の剣士に加勢しましょう!どうやら敵ではないようですし」

カシミロが到達する短い時間に黒の剣士はスラーシュを一体は倒しており、加勢の必要はないように思える。しかし、もう一方のカルカ&アントニオの受け持つスラーシュはほとんど瀕死であるため、どちらかというとき長引きそうな黒の剣士側に移動したにすぎない。

剣技は妙に中途半端な黒の剣士に疑問を持ちながらもやはり、真つ向からの戦闘にな

るとアントニオとカルカは滅法強いなどカシミロは認識を強めていた。

「助太刀するぞ！黒の御仁！」

「えっえ…ああ、よろしくお願いします。」

只得さえ不利な状況に立っていたスラーシユは、カシミロという新手の参戦に逃げの一手をとる。

態勢を180度変換し、背中をこちらに向け逃げだす姿は潔いが、さすがにそれは黒の剣士が許さない。最初に殺されたスラーシユと同じ様にグレードソードの投擲を喰らい、その場で崩れ落ちるスラーシユ。

レメディオスとアントニオの方向から殲滅終了のこえが聞こえてくる。どうやら、あちらは無事に終わったらしい。

「黒の剣士殿、助太刀…誠に感謝する。貴殿のおかげでこの危機を乗り越えることが出来た。ところで、是非とも我ら使節の代表であるカルカ様にご挨拶していただきたい。カルカ様もこの危機…名づけるなら『某使節スラーシユ襲撃事件』の解決の一番の功労者である貴方との対話を望んでいるでしょう。」

カシミロの口調に力が入り、普段とは調子の変わった舞台ナレーションのようなものになる。テンションが上がったときの彼の癖なのだ。決してすごんでいるわけではない。しかし、初対面の相手にそんなことは察せられない。

黒の剣士を不快にした可能性に行き着き、カシミロは一瞬で鎧の中の汗が引く思いがした。

「ええ、いいですよ」

だからこそ、黒の剣士の返答に拍子抜けした。なんでもないような返答であり、怒りの成分を声色から判断することはできない。むしろ、少し笑いをこらえているような鼻から抜ける声に感じたが：それこそ彼もそういった癖の持ち主なのかもしれない。

「それは、良かった。ではあちらのほうに。ああ：私はカシミロ・ガルレスです。この聖王国にて聖騎士の任についております。貴殿の名は？」

「ああ：申し送れました。私はモモンと申します。以後お見知りおきを」

：

黒の剣士がこちらに向かってくる。正直にいえば少し怖い。剣をこちらの方向になげられたことや、凄いい勢いで向かってきたことがではない。

この剣士には、なにやら良くない気配がする。完全に勘だが、勘が時に理性を凌駕する性能を発揮することをカルカは幼いながら知っていた。

「距離はグレートソードが届かない位置までにしてください。」

隣のグスタヴスにしか聞こえないであろう音量で指示する。グスタヴスが正解と言わんばかりに頷き、カルカの斜め前を陣取る。

王族として危機管理を重視するのは重要だ。しかし、あまり臆病でも王族の行動として正解とは言い難い。幼いことと継承順位が低いことから、そこまで行動に目くじらを立てられることはないと思うが、念には念をいうやつだ。尊敬するお父様の名に傷をつけることは許されない。

黒の剣士が予定よりも遠い位置で歩を止めたため、カルカがもう少し近くによるように提案する。こういった余裕を見せながらも黒の剣士と相對すると、不安で逃げ出したい気持ち湧いてくる。しかし、その気持ちを理性で抑え付けカルカはグスダヴスより少し前に出て礼を述べる。

「今回は、危ないところを助けていただきありがとうございます。私の名はカルカ・ベサーレス。この国の王族の一人です。あなたの名前をお聞きしてもよろしいですか？」  
「はじめまして、私はモモンと申します」

(名前のみ…?)

普通、名前というのには苗字と名前で編成される。それが無いということの理由として考えられる可能性は4つ。

1つはこの付近の人間でないという可能性。どこか遠い国であれば名前だけの編成の国があっても不思議ではない。隣国であり、同じ人間国家の王国でも尊い家系ほど名前を構成する要素が多くなるというローカルルールが存在するのだ。

2つ目として、冒険者の可能性である。冒険者は過去を捨てたものや、ただかっこいいからという理由で別名を名乗ることが多いからだ。ただ、この可能性は低いように思われる。

モモンという名前は聞いたこともないからだ。あれだけの身体能力をもつ人物が冒険者だったとして無名でいる可能性はありえない。

3つ目は詐称。単純に偽名を名乗っている可能性。これも可能性は低い。騙すつもりならもつと凝った名前をつけるのが常識だ。モモンという偽名はあまりにも嘘くさい。

4つ目——これは個人的に可能性が高いと踏んでいる——が亜人である可能性。基本的に人間と敵対している種族がほとんどだが、マーマンの様に人間に友好的な種族もいることにはいる。あの身体能力にスラーシユの偽装を見破る知覚は人間離れしている。亜人の名前のルールは人間とは全く違うので名前だけでもありえる。そして、先程から感じている悪寒も相手が人間ではに種族だからこそ無意識に威圧を感じているのかもしれない。

「こちらの人員で周囲の安全の確保をしていますので、それが終わるまでお喋りに付き合っていただけませんか？」

「ええ、私でよければ」

カルカの前ですらヘルムを外さないモモンにグスタヴスが注意をしようとするが、それをカルカは手で差し止める。このモモンが巫人であれば、助けてくれたとはいえ、こちらを警戒しているのかもしれない。だとしたら、少しでも高圧的な態度をとるのは良くない。

まずはモモンと話をすべきだ。聞きたいことは山ほどあるのだから。その過程でモモンの信頼をすこしでも勝ち取れば御の字である。

基本はカルカ、たまにグスタヴスが質問疑問をぶつける。結果、多くあった疑問への回答は得られた。

まず、不審な接近をしてきた理由としては声をあげるとスラーシュたちにも勘付かれるためということだった。この理由は非常に納得のいくものだ。

隠密効果をもつスラーシュの上位種が合計で7体もいたのだ。逃がしたときの損失はとんでもないものになる。

続いて、どこからカルカの使節を追っていたかだが、どうやら最後におとずれた村にモモンは滞在していたらしい。ただの農村に敵つい全身鎧の大男がいる理由を村長が考え付かなかつた結果、隠れてカルカたちが村からでるのを待っていたということだ。

この回答を聞いて、さらに新たな疑問が生まれる。

——まず、その全身鎧を脱げばいいだけなのでは？ということと、あの村にはいつ、ど

うやって来たのかということである。

「この鎧ですか？実はこの鎧は特別なアイテムでして一定の条件化でしか脱げないんです。しかし、性能は破格のものです。飲食不要になり、疲労も軽減されるのですよ。」

確かに、そのメリットはとんでもない物だ。特に長期の戦闘や行軍を行うグスタヴスは、目の前の鎧のとんでもない能力に思わず唾を飲み込む。どんなに強い騎士でも空腹と疲労には勝てない。その欠点を克服できるアイテムというのは神話の領域のアイテムといつても過言ではない。

「ただ、デメリットも多いですがね。まず鎧自体が結構な重量しますし、なにより着用者が飲食を行うと鎧が砕けてしまいます。」

「それは、大変ですな」

重たい鎧を常時着用もつらいが、やはり飲食の楽しみを奪われるのは、さすがに厳しい。しかし、それをとつてもメリットは絶大だ。いったいどこでこれほどのアイテムを手に入れたのか…

「その鎧はどちらで手に入れられたのですか？そちらのグレートソードも中々の一品でしょうし。…秘密であるというのであれば無理に教えてほしいわけではないのですが」「ああ、それは当然の疑問ですよね。実はですね…」

この後の彼の話は、なかなか壮大なものだった。どうやら彼はこの辺りの人間ではな



いらしい。遠い地と思われるヘルヘイムという場所で仲間と共闘し、多くの敵と戦っていたらしい。この鎧やグレートソードもその過程で手に入れたということだった。

「そして、あれは最後の戦いの時…魔王と呼ばれる存在に挑んだときでした。」

：

魔王「ふはははは！よくぞここまでたどり着いたな勇者達よ！」

白銀の騎士「うるさい！魔王！お前を今日こそ撃ち取らせてもらおうぞ！」

大悪魔「そう焦るな。白銀の騎士よ。お前の相手は大魔王様の右腕たる、この大悪魔が務めよう」

モモン「では、大魔王はこのモモンが討ち取る！他のものは援護をしながら、他の幹部を抑えていてくれ！」

他の仲間「うおーー！」

他の敵「全員ぶっ殺してやるぜえ!!」

モモン「おりゃー」

魔王「ぐああ!!こんなところで敗れるとは…せめてモモンお前だけでも道連れにしてくれるわ!!喰らえ!!」

：

「死に際に放った魔王は転移の魔法でも放ったのでしよう。ただの転移ではなく、あの

手ごわい魔王の本気の魔法!!気がつくどあの村に倒れていました…」

話のスケールの大きさに吟遊詩人の英雄譚を聞いているようだった。モモンの語りが上手いのもそう思わせる一因になっていたのだろう

「それでは、お仲間の方々は無事なのでしようか…?」

「わかりません…ただ一番手ごわい魔王は倒せたので、彼らなら無事戦いを終えられるでしょう」

「帰りたいとは思わないのですか?」

カルカの質問にモモンは少し考え込む。その姿はすこし寂しそうにも見えた。

「帰りたい…というよりは彼らに会いたいですかね。色々、聞きたいこともありますし。でも、彼らは上手くやっていけるでしょうし心配はいりません。それよりもこれからの私の身の振り方を考えないといけませんから…」

「であれば、聖騎士団に入隊するのはどうだ?モモン殿の力なら大歓迎なのだが」

グスタヴスがモモンの言葉に食い入るように反応する。確かにこれほどの強者を逃すのは惜しいのではやる気持ちは分からないでもないが、がつつきすぎではないだろうか。

「というか、グスタヴスはもう聖騎士団には所属してはいないのだが…」

「せっかくのお話ですがお断りさせていただきます」

しかし、モモンもその勧誘をぴしゃりと断る。その口調には遠慮がちながらもしつかりとした意思を感じられる。

「理由を聞かせてもらってもよろしいですか？」

しよんぼりとしてしまったグスダヴスのかわりにカルカが質問を投げかける。

「私は元来から冒険者気質の人間でして…色々なものをみて回りたいのです。ですから早々に職業を決めてしまうのは、少し違うかなと思ひまして」

なるほど。とカルカは納得の声を心の中で上げる。

多くの冒険を行ってきたモモンにとって、周りは全くの未知。知的好奇心を大きく刺激されているのだろう。彼を無理に勧誘するのは逆効果だろう。

「でしたら、冒険者組合という組織があるので一度訪れて見ますか？ 私たちは今から国に帰るので良かったら一緒にどうですか？」

しかし、少しでも関わりを持っておいたほうがいいのは確かだ。これほどの強者とのコネクションは聖王国にプラスに働くことは間違いない。…ただ、モモンの考える冒険者と組合の掲げる冒険者には差異があるため、モモンはがっかりするだろう。

「それに、私達を助けていただいたお礼を述べたいのです。是非、私たちの城に歓迎されていただけませんか？」

だからこそ、これが本命だ。少しでもモモンに聖王国に対していい印象をもってもら

えば、有事には味方になってくれるかもしれないのだから。

これが帝国の次期皇帝と目されるジルクニフであるなら、モモンを味方に引き入れるために、多くの見えない縛りや人間関係、はたまた謀略をはりめぐらすだろう。国の運営側に立つ人間は、相手のことより自分の国の利益を考えなければならぬのだ。

カルカのモモンの心象を優先した態度は、好意的に見れば優しく、悪く言えばチャンスをつみきれないものである。ちなみに、その態度を好意的に解釈するグスタヴスは隣で、カルカへの忠誠心を上げていた。

「なるほど、冒険者組合というのもあるんですね。そこにも興味がありますし、せっかく招待していただいたのですから、断るのも失礼でしょうし」

モモンの乗り気な態度にまわりに悟られないように、ほっと胸をなでおろすカルカ。しかし、続くモモンの言葉に動かしていた手を止める。

「でしたら、もう一度改めて自己紹介しなければなりませんね」

唐突にモモンがヘルムを脱ぐ。その情報が開かれることはないと考えていたカルカとグスタヴスはびくつと過剰に驚いてしまう。

——でてきた顔は人間ではなかった。

しかし、そんなに遠いわけではない種族。

「モモンさんはダークエルフだったんですね」

男性にしては少し長めの金髪と活発そうな顔。声でイメージしていた顔よりも随分と若そうに見える。

しかし、それも長命のエルフであればありえない話ではないのだろう。

「改めまして、私はモモン。ヘルヘイムのナザリック出身の…戦士でございます」

——後の世に聖王女の半身と言われたモモンと聖王女カルカのはこうして出会ったのだった

## メトロノーム2 / 2

「後10分か…」

莊嚴なるナザリック玉座の間にて、この世の財を結集したような格好をした骸骨がつぶやく。その姿はまさしく魔王。しかし、その口から出るつぶやきは弱々しく疲れ果てたサラリーマンが発したように聞こえた。

まあ、実際彼はサラリーマンであるし、この莊嚴な玉座の間も、魔王の様な彼の見た目も、近くで待る美しきサキユバスやメイドもデータである。なんなら、そのサキユバスは先程設定をいじられた完全なそうぞう物である。

この空間はユグドラシルというゲーム内に作られたもの。そして、そのゲームはあと10分で終わるのだ。

「結局…最後まで誰も来なかったか。」

本来なら、終了間際にログインするはずだったへろへろも残業を理由に来なかった。

それどころか、残り少なかったギルドのメンバーすら…

さみしさが魔王の中——人間鈴木悟の心を支配する。しかし、さみしさを覆われた心の奥底から湧々と湧き上がるものがある。怒りだ。

「なぜだ！なぜなんだ！どうして最終日くらい来れないんだ！！たった一日じゃないか！！あのころの楽しい記憶は…あの時間は…1日時間を割くのもできないほど価値がないというのか！！」

はあはあ、と息切れながら発散した怒りが消え、また悲しみとそして、せつなさも到来する。

時間を割いていて熱中していたとしても所詮はゲーム。生活の余暇で楽しむものと同じゲームを選択し続けるものは、ほとんどいない。ましてや10年である。実際、アインズ・ウール・ゴウンには鈴木悟以外は残らなかった。

頭の冷静な部分ではそんなことは分かっている。しかし、鈴木悟の――本人は自覚していないが、狂人としての部分が自分と同じ選択をしなかった仲間たちを攻める。そして、心では自分は仲間達に捨てられたのだと悲哀する。そして、色んな感情が混ざり合い怒りがもう一度帰ってくる。最後に自嘲気味に笑う。

（怒りとは自分の想定していた通りにもが進まなかった時に発生する感情である…か。かつての仲間たちを攻め怒り、かつての仲間の言葉でその怒りを静めるって…）

とんだピエロだ。

「ははははははあ!!もうあと5分かあ。」

どうせ、最後に彼らが来ることはない。なら畏まって荘厳な最後を迎える魔王ではな

く、楽しく愉快なピエロとして迎えよう。最後は楽しいほうがいい。

「そうだろう?」

口元の変化しない骸骨が終始微笑みを湛える美しきサキュバスにおどける様子は、控えめにいつても不気味だ。鈴木悟はアバターの姿で大きく息を吸う。そして、戦闘態勢の構えをとる。

「ウルベルトさん!後ろ!!へ朱の新星!危ないですね!後ろには気をつけてください。あなたいくら強くても魔法使いなんですから!近距離攻撃なら一撃で削られるんですから自覚もってください!」

モモンガが魔法を何も無い空間に魔法を放ち、誰もいない空間に話しかける。

「…えっ!堂々としていないと相手への威圧が足りない!?設定凝りすぎですよ…」  
今度は別の方向を向く。

「ちよつと、ペロロンさん!!まだ早いです!!ほら、敵に気づかれましたよ!!へ星幽界の一撃!ほんとに…能力はあるのに詰めが甘いですね」

〔上位物体創造〕

鈴木悟はモモンガとして習得している数ある魔法のうち一つを唱える。黒の全身鎧を着用し両手にグレートソードを構えた姿は魔法使いには見えない。凛々しく、歴戦の兵という印象を見たものには与えるだろう。



「ハアアアア!!」

ブンブンと空を切る音を発生させながら、剣を動かす。

見えない敵と戦う要領であり、シャドーボクシングといえは聞こえはいいが、内容は自分に都合の良いごっこ遊びのようなものだ。

「たつちさん、一緒に殺りましょう!!〈現断〉」

モモンガの腕から発生した魔法が、王座の横の装飾に当たる。運悪く、その壁はダメージ判定が通る素材を使用していたらしく、荘厳な装飾が拉げる。

先程まで声を大きく上げていた様が嘘のように、縮む。

「あー、やってしまった…これは結構修復にかかるだろうなあ。最近、財政きついのにどうしようかなあ…」

縮んだ声は、何かに気づいたのか後半になるにつれて涙声になる。

「あははは、もう終わるんじゃない。なのに修復の心配とか。最後の最後にこんなんで我に返るのはきついなあ…」

仲間たちが帰ってこないなら、自分で想像して作ればいい。そうすれば、最後を一緒に過ごしたようなものだ。

まさしく、狂つてるとしか言えない行動だが、さすがにこれは鈴木悟自身もやばい行動であるとは、自覚はしていた。一時の気の迷いというよりもキチゲ解放のようなもの

だ。

しかし、自ら認めるアホな行動で空虚であるが楽しくユグドラシルを終えるーそんな苦肉の策すら全うできない自分に嫌気がさす。

(俺は、ピエロにすらなれないのか…)

コンソールを確認する。端の方に表示された時計は消えない現実として、しつかりと数字を刻み続ける。23:59:42、43、44:

もう時間はない。鈴木悟は、全身鎧のまま床に寝そべる。

スリットから眺めるのは、このゲームにおいて彼の恩人でもあるたち・みーの旗。そして、一瞬で他のメンバーの旗を目で追っていく。

23:59:51、52、53:

本当は、最後の瞬間をどう過ごすかは決めていた。でも、それもどうでもいいことのように思えてきた。投げやりな気持ちのまま、手足を大の字にした態勢で動かない。

23:59:56、57、58:

もし、自身のキャラ設定に準ずるならこの瞬間は、魔王の玉杖と称せるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを片手に堂々と玉座に座するべきだろう。

しかし、それはモモンガの行動である。モモンガは、自身が楽しんできたロールプレイにより発生したキャラであり、周りを楽しむために鈴木悟が創り出し、成りきつてい

たキャラクターだ。

自分一人しかない空間でユグドラシルの最後を迎えるのだ。モモンガではなく、鈴木悟として最期を迎えるのも悪くはないだろう。

（「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ」…か。この言葉は、今の俺の気持ちとは違うかもなあ）

23 : 59 : 59 :

「楽しかったんだなあ…」

そう、最後にはいろいろあったが楽しかった。これ以上にこの空虚な心を言い表す言葉が湧かない。気の利いた言葉ではないが、鈴木悟がユグドラシルの最後を看取る言葉としてはふさわしいものかもしれない。

:::00:00:00

...

「ハアツ!!」

鈴木悟は、今まで、意識を失っていた体に力を入れて一瞬で上体を起こす。

どうやら、気づかないうちに寝落ちしていたらしい。

体に一瞬で悪寒が廻る。完全に遅刻しているであろうことを確信できたからだ。

言葉にしづらいいーあえて言い表すなら血の気の引く感覚のまま、時計を確認しよう

と周りを見回す。

この時、鈴木悟は自分の部屋を想像して時計のあるであろう位置に視線をむけるが：視界一杯に移るのは、自然。森とはいえない樹木量であり、林と表現するのが適当であらう。

ところどころで、小鳥のさえずりが聞こえる。

完全に部屋の中の光景ではない。

(なんだここは…まだゲームの中なのか？それともバグ？)

外とは、思わなかった。なぜなら、自分の暮らしているエリアにここまでの自然は存在しないのだから。

考えられるのは、ログアウトしていないという可能性。

それなら、まだ全身鎧を着ているのも頷ける。

(大方、サーバーダウンに際してなにか不具合が生じたんだろうなあ。テレビの放送事故の時の「もうしばらくお待ちください」的な状況かな)

楽観的に考えるモモンガだったが、とんでもないことに気づいてしまう。

匂いがあるのだ。

MMORPGでは、ある程度以上の感覚を制限する規定が設けられている。

これは、あくまでも仮想空間と現実は違うものであるというモラルを忠実に守った結

果できた規定である。∴現実での支配者側の思惑がそれ以上ないといえば嘘になるが。(おいおい∴法律違反のとばっちりを受けるのは勘弁だぞ! つて、なんか口元もうごくんですけどお! どうなってんのこれ!?)

鈴木悟が逮捕という社会的死を感じ、焦っているところに自分とは別の焦った声がかげられる

「あれ!! 動けるのかあんた!!」

12、3歳程度で明らかに村人という格好をした少年が呆然と(サーバの不具合解消まち)立つ鈴木悟に声を掛ける。

驚愕とした声色のなかには、懐疑の感情もあきらかにこめられており、どこかが該当するかはわからないが自分に怪しいと感じるところを見つけたらしい。

(なんだ、このキャラは? 不具合を処理してることとはNPCが出てくるわけじゃないよな? 普通に考えるならこの騒動に巻き込まれた同士ということだが∴)

どうみても、プレーヤーに見えない。確かに自由度の高いユグドラシルでは、村人のロールプレイという遊び方もできないことはない。

10年間ユグドラシルをプレイしていた自分も聞いたことないのだが。

(世の中には特殊な人がいたもんだな∴しかも、格好まで小汚いのがリアルだな。最後にログインしていたということは確実にカンストしてらるだろうに∴フェイク上手いな)

この格好のキャラにPVP挑まれたら油断しそうだな。と感心しつつもあることに気づく。

（「お前、動けるのか！」 って言ってたよな？もしかして、あつちは不具合で動けなかったのかな？）

どうやら、ユグドラシルが最後に不具合を起こしてしまったのは間違いないらしい。

目の前の少年のアバターの発言から、鈴木悟は自らの考えに整合性をもたせる。

「そーですね。動けるみたいですよ…とところでこれってどういう状況ですかね？自分、結構寝落ちしていたみたいで…元々はヘルヘイムにいたんですけど。ここはどっかのフィールドだったりするんですかね？」

まずは、状況確認。あちらのほうが先に不具合に巻き込まれていた気配は、言動から察せられる。色々、教えてくれるだろう。

「ヘルヘ…ちよつと、その場所は聞いたことないが…それに状況はこつちが聞きたいんだけど…」

相手の要領を得ない解説に鈴木悟は眉をひそめる。ユグドラシルプレイヤーでヘルヘイムを知らないわけがない。ユグドラシルが名残惜しい気持ちは痛いほどわかるが、村人のロールプレイを続行する状況ではないだろう。

こちらはサーバー不具合で仕事を遅刻してしまっているかもしれないのだ。こんな

戯言に付き合える精神状態ではない。

こちらはテンションが落ち込んでいるのだから、あまりそちらのテンションに巻き込まれないでほしいものである。

相手が微妙な雰囲気になったのを察したのか、村人の少年が慌てて言葉を続ける。

「いや、俺はこの近くにある井戸に水くみにきたところだったんだけど…：そしたらあんなにそこに倒れてたから、介抱しようと思って食料と水を持ってきたんだよ」

ここで、村人プレイを天井か!!

余りの空気の読めなさに、鈴木悟は顎をパツカと開けて驚いてしまう。

(いや、俺だって記念にいろんなロールプレイしてみたい!!って思うかもだけど、サーバードアウンの不具合発生でログアウトできないという状況に、村人ロールプレイの重ね掛けする!?)

だが、ここで新しい可能性が鈴木悟のなかに浮上する。

(もしかして、こいつNPCなのでは?)

この会話の通じなさは、既視感がある。

みな、一度はドクエやポモンなどのRPGで経験したことがあるだろう。

王様「この国を魔王から救ってくれ！」

主人公「はい ↓いいえ」

王様「そんなこと言わずに頼む！」

という無限ループである。

さすがに22世紀のゲームにそんな前時代的な選択肢無限ループはないが、ゲームの根本は変わらない。

いきなり現れたNPC。見たこともないフィールド。表れないコンソール。

これらから推測されることは…

(もしかして!!ユグドラシルIIとかか!?!匂いや表情のパッチもアップデートしたってことかな?もし、そうなら手こんでるなあ〜)

プレイヤーなんの了承も得ずに無理やり体験させるのはどうかと思うが、あのクソ運営ならそういうこともやりかねないと納得する。

ちなみに、NPCがこちらの受け答えに対応した返答をしたり、表情を変化させることは22世紀の技術をもってしても現実的ではない。

ただ、鈴木悟はユグドラシルが終わっていないという希望による観測と精神的疲労によりその考えに至らなかった。

——むしろ、必死に至らないようにしていたのかもしれない。



（一応、こいつがNPCなら多分これはプロログってことだよな？話を合わせると何かイベントでも発生するのか？）

そう、考えると先程から鼻についた村人ムーヴも快く受け入れられるというものである。

「そうなんですか。それはありがとうございます。ちなみにヘルヘイムという土地を聞いたことは？」

「さっき言ってた場所か？うーん…知らないし、聞いたこともないな」

少年は少し考え込むポーズをしてから、名案が浮かんだとばかりの表情を顔に顕す。

「まあ…困ってるみたいだし、うちの村の村長にきいてみたらどうだ？俺はそのヘルヘイム？はしらないが村長なら知ってるかもよ？」

（お!?これはイベント発生か!?)

テンプレでいえば、このあと村長にモンスター退治か薬草採集の依頼を受けれるはずだ。

この選択肢をNOにしては前に進めないし、そもそもNOを突き付けてやることもない。

「それは、ありがたい、是非案内お願いできますでしょうか。」

「おうーまかせとけー！」

少年はどこか嬉しそうに村への帰路につく。

その後ろ姿を見ながらもゲーム脳で状況の整理を行う。

(ここいつらの村ってことは、人間種の村か…全身鎧解かないで人間種のふりしないと袋叩きにされるだろうな。念のため名前もモモンとかにしとこ。前作のプレイヤーにいきなり襲われるのも嫌だし)

歩きながら、周りの自然が目に入る。匂いのデータはどうやってもってきたか不明だが、自然の匂いの心地よさに胸が躍る。と同時に当たり前の疑問も浮かぶ。

「そういえば、そもそもここはどこなのでしょうか？」

これがユグドラシルIIだとしたら、聞いたことがある地名が飛んでくるはずだ。

(NPCは知らないって言うてたし…地形の感じからヘル Heim じゃあないよな)

「おいおい…それも知らないのか？どうやってここまで来たんだよ？」

(そんなの俺が知りたいの!!)

NPCに雑談まで準備されていることに驚きとツツコミを同時並行で行う鈴木悟。

(適当に答えるか…選択肢すら出てこないし。いくら未知を売りにしているとはいえ、この仕様は不親切なんじゃない?)

どうやら、ユグドラシルIIは前作よりも自由度が圧倒的に高いようだが、痒い所に手

が届いていない感じがする。そんな評価を心のなかで下す鈴木悟。

「あー……ちよつと、覚えてないんですよ。気づいたらここに倒れてたみたいなので」とりあえず、無難に記憶が混濁している様子を演じてみる。

結構、怪しい答えになってているがなにもわからない以上仕方ない。

「記憶喪失的な感じか……大変だな。もしかしたら、なにか魔法でそうなったのかもな。あつ、さつきの質問に答えてなかったな。ここは、ローブル聖王国のトレド村だぜ」

あつ！と声を上げ、鈴木悟の斜め前を歩いていた少年が立ち止まる。その後、勢いよく振り返る。そわそわして落ち着きのない子供である。

「大事なことを忘れてたな！俺の名前は、ゴルカだ。よろしくな！あんたの名前は？」

「あ、ああ……私は……モモンです。こちらこそ……よろし、く」

鈴木悟もといモモンがたどたどしく、自己紹介を行う。しかし、それも仕方のないことである。現在、彼は絶賛大混乱中であつたのだから。

：

ゴルカとモモンは、少し前とは打って変わって無言のままに村への道を行く。

これは、モモンが「なんか、記憶が戻りそうなので集中します」という遠回しの話しかけるな宣言から出来上がった空間である。

ゴルカは、そわそわとモモンは顎に手をあて少しうつむきながら歩く。

ゴルカには、密かな夢があった。それは聖王国軍に所属することである。

勿論、後々には聖王国の將軍などになりたいとも思っているが、まずは入隊できなければ話にならない。

一応、剣の腕に多少自信はある。しかし、聖王国壁内の村はモンスターと遭遇することもないし、小さな村でまともに剣術を教えられる人間はいない。

長男である為、よっぽどのことをしないと軍への志願を親は許さないだろう。徴兵中に実力を発揮し活躍するなどの理由があれば別だが。

あと、数年で徴兵がくる焦燥感に苛まれている状況であったのだ。そんななか、遭遇した剣士。立派な体躯に高級そうな装備。どうみても腕のたつ猛者であるだろう。

(村で剣の稽古でもつけてもらおうぞ!!)

そわそわとあつい視線をゴルカは、モモンに送るのだった。

そのあつい視線にモモンは気づいていなかった。なぜなら、彼はある考えに至ってしまえば、まいそれどころではなかったからだ。

それは、ユグドラシルⅡが始まることよりも遥かに突拍子もなく、MMORPGに匂い表情が実装されるよりも可能性がない…そんなバカみたいな考えである。しかし

：

(そう考えると全ての辻褄があう…合ってしまう)

——ゲームではない可能性。

(ありえない……いや、しかし)

ローブル聖王国。全く、聞いたこともない地名だがユグドラシルⅡとして新しく追加されたエリア。または、前作では誰も発見できなかったエリアなのかもしれない。

最初は、そう思った。

だが、ここが全く聞いたこともない場所であると知った時、バラバラだったピースがカチツと綺麗にはまってしまったのだ。

無意識に考えないようにしていた結論が現実の色を帯びてしまったのだ。

——リアルな風景、表示されないコンソール、動く表情、匂いそして、聞きなれない地名。

だが、確定ではない。一刻も早く確かめたい。確かめて、ここがゲームであることを証明したい。そして、バカな考えを浮かべたもんだなと安心したい。

(だが、もし…本当に万が一、これがゲームじゃなかったら…ここで確かめるわけにはいかないしな…)

いきなり、本当の姿を晒して殺されてしまう可能性もある。

人間などいつ裏切るか分からない生き物だ。鈴木悟は最も親しかった人達を思い出しながら悪態をつく。

(まずは、おとなしくこの少年…NPCについていこう。確認はその後だ)

鈴木悟はこの時、気づいていなかった。普段ならここまで焦れば出るであろう脂汗が体に流れていないことを。

：

「まじか…まじでか…」

村長に案内された村の空き家で、頭を抱える全身鎧。

勿論、村長はヘルヘイムを知らなかった。ユグドラシルの名前を出そうかとも思ったが、やめておいた。

結果から言うと、どうやらここはゲームではないらしい。現実といっても良いのかはわからないが、ゲームでは確実がない。大事なことなので2回言った。

「まあ、そこはいいよ。百歩譲って。ユグドラシルがなくなった俺の人生なんて社畜として無感情に生きる道しか残されてないし…」

鈴木悟の焦りを含んだ震え声が鎧に遮られて、くぐもる。

ここまで焦っているのには理由がある。まあ、ゲームのアバターで異世界?に移動してしまうのも十分に焦る理由になりうるのだが、それではない。

なんと、元のアバターであるモモンガのステータスに戻れないのだ。色々、手を尽くしたが能力はモモン(戦士としての偽名)のままである。

説明しておく、この状態：つまりモモンの状態では戦士職LV33程度の実力しか発揮できない。だが、魔法は片手の数くらいなら使えるし利用者を選ばないアイテムなら使用可能だ。スキルは使えないが。

この事実が発覚したときもかなり焦ったが、まだ余裕があった。

ある程度、魔法が使えれば100LVプレイヤー相手でも勝つのは無理だが、逃走を図ることは可能だからだ。

しかし、魔法が発動しない。これは、かなりまずいと焦る鈴木悟。

スキルも使えないLV33戦士職など中級ステージの序盤くらいしかクリアできない：はつきり言つて雑魚だ。モモンガでよく召喚したデスナイトにすら劣る。

取り柄といえば、体力、防御力はLV100に見合つた数値であることと、上位物理無効化くらいである。

さすがにこれは、まずい。

本当に：貧乏性の鈴木悟からしたら本当に嫌だが、シューティングスターの指輪を使用することにした。これで、幾分か状況が好転する。

いくらかけたつげな：と飛んで行つた現金に思いをさせ、指輪を発動しようとする。

——しかし、反応がない。

ここで、焦りが最高潮に達する。慌てて、ガントレットを外す。

当たり前のように出てきた骨の手に驚くこともなく、そこに嵌った指輪——まずはシューティングスターを眺める。

輝きがない。未使用のシューティングスターは内から輝きが放出されるエフェクトがあつたはずだが……

その後、他の指輪——検証可能なものの効力もなくなっていることも確認する。

どうやら身に着けていたアイテムの効力は消失したらしい。

これだけでもありえないくらいに損失だ。指輪スロット両腕分の解放、シューティングスター、その他の耐性獲得……鈴木悟のリアルマネーが何桁飛んだのか計算するのも馬鹿らしいレベルである。

不幸中の幸いというべきなのは、モモンガのアバターに内包されたワールドアイテム、通称モモンガ玉はどうやら無事らしい。

さすがは、ワールドアイテム。世界の理を変えるほどのアイテムと言われるだけはある。

それと、アイテムBOX内のアイテム。これも無事だった。その部分だけはあるがたかつたが、考えれば考えるほど状況は最悪だ。

そして冒頭に戻る。

「俺が異業種なのは内緒にしないと……村長も今は友好的だが、正体がばれたら……下手



したら殺されるかもしれない」

今、正直な鈴木悟の気持ちを表すなら一人になりたかった。

あの時のショックがしつかりとトラウマとなり、人間との関わりに無気力になっていた。

アンデッド化も少なからず影響しているだろう。ガントレットの嵌った手を握った  
り開いたりしながら下にある骨の手を幻視する。

もし、問題ないならひっそり自分の気持ちに整理がつくまで引きこもりたい。

しかし、現状で一人で生きていけると思うほど考えなしではない。

まず、村人達に怪しまれないこと。これがこの世界で生きていく第一関門だ。

しかし、これが案外難しい。

今の自分は弱体化しているため、村人たちには勝てたとしてもこの国——ローブル聖  
王国の軍などに討伐対象にされたらたまったものではない。

無数に挙がる問題を解決しようと躍起になればなるほど、頭は混乱していく。

どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、  
どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、どうする、  
どうする、

余裕のない思考は明らかに空回りする。∴がすぐに冷静になる。

いや、冷静にされたという感覚。鈴木悟が今までの人生で味わったことのない感覚だった。

(なんだこの感覚…全身鎧の下が骸骨だったのは確認したんだけど…それが関係あるのか?)

次から次に起こるトラブルに対処できない状況で冷静になれるのは正直ありがたい。だが、自分が人間から離れた生物? に気づいたら変身してしまっていたことに少し切ない気持ちになってしまう。

だが、そのおかげで頭がスッキリとする。

中でも、こちらに転移してきた言い訳。骸骨の見た目。これらは早急になんとかしないといけない問題をピックアップする。

(村長は明日、村人への紹介をするって言ってたよな…村人たちが納得するような。完璧な言い訳を考えないと)

アイテムBOXを探り、使えそうなアイテムを探す。こちらに移動してきた言い訳は適当にでも考えられるが、骸骨の見た目はなにかアイテムがないと誤魔化しきれない。

魔法が使えない以上、アイテムに頼るしかないのだ。

しかし、アイテムBOXの中には膨大な量のアイテム。当たり前である。10年以上、アイテムを手に入れてきているのだ。このレベルの廃課金でアイテム整理ができて

いるものなどそうそういない。鈴木悟もできていない多数派に所属している。

マトリョーシカの様にてくる無限の背負い袋。イベント毎に適当に突っ込んできたアイテムの数々。そして、全く用途が思い出せないモブアイテム：これは鑑定の魔法を使えない状態では、記憶力に頼るしかない。脳はないが。それらに苦しめられること1時間弱。

「おおーこれはいけるんじゃないか!？」

銀を基調に細かい緑の装飾が施された首飾りを取り出し、はしやぐ鈴木悟。

やっと使えそうなアイテムを見つけ、思わず声を大きく上げてしまう。時間はもう夜なので、これはいただけでない行為である。村人たちから悪印象を受けるのは出来る限り避けたい。それでも上がったテンションは抑えきれず、小声で話し続けてしまう。

「まさか、これが俺のアイテムBOXに入ってるとはなあ。確か、やまいこさん：いや、あんころもちもちさんだったか？のものになると思うんだけどなあ：俺の予想通りならいけると思うんだけどなあ」

ぶつぶつ喋りながら、首飾りを装備する。

「おっ！成功じゃないか!？」

ヘルムから覗く顔は、中性的なイケメンの黒妖精の姿。この顔は、アインズ・ウール・ゴウンのギルメンまたは、一部のユグドラシルプレイヤーなら知っている。

第六階層守護者の片割れアウラ・ベラ・フィオーラの外装だ。

イケメンと言ったがれっきとした女の子である。

ちなみに弟は男の娘である。全く今の状況と関係ないが大事なことだ。

（確か、この「森妖精の首飾り」の外装データがいじれるからって、限りなくアウラに近づけたものを茶釜さんが何個か作成してたんだよな…それで第六階層でアウラを囲んで遊んだんだっけ）

影分身の術など宣いふざけていた面子を思い出す。

（最後にもう一度、こういうアイテムで遊びたかったな…最後くらい来てくれてもいいだろうに!!………今はそういうことは考えるの止めよう。落ち込むだけだし……）

アイテムBOXから無限の水差しを出し、飲んでみる。水は勢い良く床を濡らす。

（どうやら外装だけらしいな。というか、当たり前だけどこれ女の子の体だな……。まあ、外装のサイズは自動で合うようになってるし、子供の設定だからそんなに女性的でもないから大丈夫か?）

鎧を脱がなければ問題ないだろうが、少し不安でもある。それ以前に外装を幻術で見せているだけなので、不安はつきないのだが…多分、これ以上適したアイテムは見つからないだろう。

「まあ、外装はこれでいくとして……こつちにきた理由か…気づいたらこつちにきてたつ

ていうのは決定として。なんでそんな状態になるかなあ」

頭を抱えて悩む。記憶を遡り、脳をフルに回転させる。存在しないが。

「確か、ゴルカが魔法のこと話してたし…村長も飛行とか魔法の名前出してたよな？とりあえず魔法でここに来たという事にできるか？…ん、まてよ…いいこと思いついたぞ」

端正な黒妖精の顔を歪め、悪戯な笑顔を浮かべる。

この時、思いついた言い訳が壮大なものになり、村人の語り草になるのだがそれはまた別の話…

——それから時は1か月ほど飛んだある日。鈴木悟は運命を変える人物に出会うことになる。

## ホープランド

モモンを最後尾にして、馬車二台は首都ホバンスを目指す。

(しかし、ますます謎の人物だわ…)

カルカが最後尾の存在に注意を惹かれるのも仕方のないことと言える。話もまとも、いぎモモンを首都を案内する段階のこと。

問題は起きた。モモンが大きすぎるのだ。

とてもじゃないが、今ある馬車には乗れない。一人、歩いてもらうのも相手の印象を考えるとかなり悪手である。

走力は落ちるが、馬車を引く馬に乗ってもらうしかないという案が出た時、モモンが自ら馬型のゴーレムを召喚したことによりこの問題は解決した。

(あれも冒険で手に入れたアイテムなのかしら…)

普通、あれほどのアイテムをほしい人に見せるのは憚られるものだ。

この世界で強力なアイテムの価値は計り切れない。それでも簡単に披露できるのは、こちらを信用してくれたか。あれほどのアイテムは大したことがないと思っ

か。

それとも、奪われることなど考えられないほど強者なのか。

王族という面子を鑑み、冷静を保っていたが人目を気にしないのであればもつと話を聞きたかった。

勿論、珍しいゴーレムについてもだが冒険譚でもある。

カルカは非常にしつかりしているとはいえ、まだ11歳。そういった好奇心や冒険心は人並みにある。むしろ、王族として危ない橋は渡らないからこそ惹かれるものでもあった。

また、モモンの人柄もかなり好印象でそこが、話をもつと聞きたいという気持ちを強くしているのかもしれない。

しかし：

（なぜか、モモンさんと接すると鳥肌が収まらないのよね…まるで、凶悪なモンスターと対峙しているときみたい）

あの、全身鎧の下がとんでもない化け物だったとしても不思議ではないとすら考える。しかし、実際にはかなり整った黒妖精の顔が出てきた。

人柄は紳士的で理的。そういった好印象も抱いている。しかし、この感覚だけは抜けきらない。

他のもの達もそうなのだろうか？

歴戦の戦士であるグスダヴスにアントニオには、この感覚の答えがでていられるかもしれない。

レメディオスはうん：もしかしたら、鋭い勘でモモンさんに何か違和感を感じているかもしれない。眠そうな半目をしている時点で期待できないが。

レメディオスが居眠りをグスダヴスに注意される前にカルカが質問を投げかける。

「えーと、これからモモンさんを冒険者組合に案内して後日、おもてなしをしたいのだけど：その前に聞いておきたいことがあります」

グスダヴスとアントニオがカルカの言葉に姿勢を整え、畏まる。

レメディオスは姿勢はなんとか畏まっているが、相変わらず眠そうだ。

「モモンさん：いえ、あのモモンという騎士にあなた達はどういった感想をもちましたか？聞かせていただけますか？」

「そうですね：基礎能力が異常に高い戦士という印象を受けましたね。感知能力やスピードも英雄の域に達している」

「私もグスダヴス様と同じ印象ですね。ただ、剣技はいまいちのようです。亜人種の基礎スペックで押していく戦闘スタイルかもしれないですね。しかし、冒険者に当てはめるのであればアダマンタイト級でもおかしくないと感じました。」

「そうか？体裁きがうまいもんだからそう感じるかもしれないが、剣技がおそまつすぎ



たではないか。大剣を二刀持ちの時点で、剣技の常識は通用しないので一概には言えないが」

グスダヴスとアントニオがモモンの戦闘スタイルの面から感想を述べる。実際モモンと戦闘したのだからこういう感想がでるのはあたりまえなのだが、カルカはそういったことを聞きたいのではない。

しかし、一度できた流れを切るのは、あまりいいとは言えないので、浮かんでいた疑問を投げかけてみる。

「そういえば、あの大剣はそうとう重量がありそうでしたね。あれを振り回せるのはアイテムの力でしょうか：それとも黒妖精の種族は力持ちな種族なのでしょうか？」

グスダヴスが苦笑いの様な表情を浮かべる。しかし、それはこちらを嘲笑したものはなく幼きものに向ける微笑みの類のように悪意のないものである。

黒妖精のスペックは、聖騎士団に所属するものにおいてどうやら常識だったようで、それを質問したカルカに微笑まじさを感じたんかもしれない。

しかし、主（雇い主）に向けるには相応しい態度ではない。

そのことに気づいたグスダヴスは、軽い謝罪を入れ話し始める。

「黒妖精は人間よりも感覚器官や肉体能力で優れた面の多い亜人です。しかし、特に彼らが腕力が強いという特徴は兼ね備えていません。単純に鍛錬したか、カルカ様がお

しやるようにあの太剣が相当な魔法武器なのかも知れません」

グスダヴスがカルカが分かっていないであろう黒妖精の情報を伝える

しかし、いつになっても本題のカルカが感じたモモンへの違和感には触れない。自分が過敏になりすぎていたただけだろうか？とカルカは思い始める。

「ところでレメディオスはどうだった？」

カルカが先程から、首をあかべこのように時々ガクカカクンさせているレメディオスに話を振る。

「ふえ!!…私はあの鎧が相当高価な魔法武器だと思えます！アントニオ…さんの攻撃はともかく、私の攻撃でも傷一つついていませんでした！」

「いちいち、余計なことを付け加えないと喋れないのか!?!グスダヴス様がいるから一応、さんはついているが」

「五月蠅い！私は事実を言ったまでだ！」

「おーおーそうかい。ホバンスに戻ったらボコボコにしてやる。訓練所に来いよ」  
「静かにしないか！カルカ様の前で騒がしい!!」

カルカは気にしないというジェスチャーをグスダヴスに送る。

しかし、一度話を振っただけでここまで騒がしくなるレメディオスの世話は大変だろうなどグスダヴスを気の毒に思うカルカであった。

「さて、話は逸れましたが皆さんの意見は大変参考になりました。お父様への報告は私が直接行いますが、グスダヴスに報告書の提出をお願いしますね」

「はっ！畏まりました。」

これだけ、話合ってもカルカの感じた感覚の説明に充るものはなかった。

きつと、彼の実力が威圧感となってカルカに伝わったのかもしれない。今は、その様に自分を納得させておくことにした。

・  
・  
・

(もしかして、王族のおもてなしってめっちゃ豪華なパーティーとかなのでは!!?)

馬型ゴーレムに乗って、気を抜いていた鈴木悟はとんでもない事実思い至り、体をびくつと動かしてしまう。

乗っているのがゴーレムだからいいが、本物の馬であれば落馬は免れなかっただろう。

(つてことは、なんかこう…挨拶の仕方とか、食事のマナーとかあるの!?!そんなの小卒の俺が知るわけじゃないじゃん!!いや、食事は食べれないけど!)

正直、今回のおもてなしとやらに鈴木悟は乗り気ではない。確かに冒険者組合というものには興味があるが、アンデッドに豪華な食事など出されても困るだけだ。

では、なぜ断らなかつたか…。それは、村人への恩返しのためだったりする。

（結構、長い間お世話になったからな。村人はいらぬというだろうが、やはり恩には恩を返さねばな…今回の謝礼金をそのまま村に寄付しよう。それに、ちようどいいからこの食事会とやらが終わったら旅に出てみるとしよう。立つ森跡を濁さずっていうしな！恩を返して、気持ちよくお別れだ）

微妙にあつていないことわざを無理に使い決意を固める鈴木悟。見る人によつてはそれつて手切れ金では？と思うだろうがそれは、本人は気づかないだろう。

「モモン！本当に俺もついでいっていいの!?」

ちなみにゴルカも連れてきている。本人には村に連れてきてくれた感謝を理由にしている。しかし、実際にはいつも「剣術を教えてください!!」とせがむゴルカを適当にあしらっていた罪悪感を晴らすためというのも理由だったりする。

自分が食べれない料理を食べる担当が欲しかっただけというのもあるが。

「ああ、俺はお前に村に連れて行ってもらったことに感謝しているからな。そのお礼だと思つてくれればいい」

（これで、剣術を教えなかつたのは大目にみてくれよ!!）

（というか、こんなみてくれしてて剣が使えないつてやばいよなあ。まあ、これに関しては自分ではどうしようもないからな。後日の課題。そうだ！ゆくゆくは出来る様になればいい！）

必死に心の中でいいわけしていると、ゴルカがそういえば、といったふうに質問を投げかける。

「てかモモンって最初、俺に敬語だったよな？あれなんで？」

「ああ、俺は初対面の人には丁寧な言葉を使うように心掛けているんだよ。乱暴な言葉は無駄なトラブルを生んだりするからな」

最初はプレイヤーだと思っていたからとは、勿論言わない。

「ふーん。やっぱりモモンはすげー頭いいな!!俺も将来、聖王国軍に入ったらそうするよー」

(小卒のおれが賢いと言われるのも複雑な気分だ…)

「そうだな。今回、聖王国軍の関係者がいるんだから剣の稽古をつけてもらえるかもしれないぞ。俺は、魔王にどうやら力を封印されているみたいだから教えられないが」

ちなみに、剣が使えないいいわけも魔王のせいになっている。これは比較的最近考え付いたいいわけだが、案外重宝している。

一人になるまで、怪しまれる要素は極力排除しなければならない。

「まじか!!モモンありがとな!!俺が軍士になるのを応援してくれるのはモモンくらいだ！」

「おおそうか。まあ、あまり興奮しないようにな。」

(そりゃ、親は畑を継いでほしいから反対するだろ…それに軍つて危険な仕事だろ? まあ、本人の憧れを否定するのもあまりいいとは言えないしこんな感じでいいか)

別に応援してるわけではないがそれも言わない。

あの村に世話になっていたのは、右も左もわからない状況で一人になるのは危険だったからだ。そこまで深い仲ならうと考えていないのだからこれでいい。

(あー。取引先での作法とかでいいのか? 一般常識は村で学んだけど王族の作法とかさっぱりだぞ)

ゴルカとの会話を終了すると、すぐに近い将来恥をかくであろう自分が容易に想像できさる。

(まあ、どうせ俺は人間でもないしこいつらと関わるのもそうそうないだろうから、気楽にやればいいんだよな。そうだよ。リアルの営業に比べれば楽なほうじゃないか)

などと、開き直ってみる。しかし、

(やっぱ、いやだなあ)

それとこれは別。異世界に来てまで恥はかきたくないとは色々、対策を考える。

策などなにも浮かばないまま、目的地につくことは薄々勘づいてはいたが。

(異世界にきてまで胃を痛めることになるとは…村にいた時は結構スローライフだったのにな…)

遠い目をしながら平和だった過去を思い出す鈴木悟であった。

「ふう、疲れた」

鈴木悟は、案内された部屋のベッドに腰を下ろす。

「さすがは、城の中の部屋なだけあるな。高級感しか感じない。」

言葉の内容は褒めているが、一番込めている意味は落ち着かないだ。

これでは溜まった心労を癒すこともできない。

「まあ、あともうちよつとでこの国ともお別れなんだし。たまにはこういう明らかにおちつかない部屋で過ごすのもいいか」

アンデッドには、大してありがたくもないふかふかのベッドに寝転がり、さつきまでの出来事を振り返る。

結果として、最初に懸念していた堅苦しいパーティーなどはなかった。

一応、王への謁見など現実では相對しえない特殊な場面もあったが、周りのメンツのマネをしてればなんか終わってたという印象だ。

日本のサラリーマンをなめてはいけない。空気を読むのはお手の物である。

ちなみにゴルカは今部屋にいない。

今は馬車内にいた一人の軍人のアントニオに稽古をつけてもらっているそうだ。

プチ休憩が訪れた解放感から伸びをして、体のコリをとろうとする。筋肉もない体がこるわけではないが、こういったことをしてしまうのは人間だったころの残滓ゆえかもしれない。

それだけ緊張していたということもあるが。

「しかし、冒険者組合って全然冒険関係なかったな。無駄足とかいうレベルじゃないぞ。改名を要求するレベルだ」

掲げる看板に偽りしかなかった施設は、密かに楽しみにしていただけあつてガツカリ度も二倍だった。もし、リアルにあれば消費者庁が大忙しになるであろう詐欺まがいな名称だ。憤慨したが、今はそこまで気にしてもいない。

どうせ、あと数時間後には適当に一人で遊ぶ気なのだから。むしろ組合などがあつてもルールが煩わしかったかもしれないのだから、早々に損切りできたと喜ぶべきだろう。

しかし、小日本人的思考の鈴木悟からするとなんの組織にも属していないというのは心細かったりする。

(やつぱり、もう少し情報収集してからかな…旅するのは)

あの村に在る間にこの世界の常識を得れるだけは得ておいた。

しかし、なんせ調査対象は田舎の村人だ。彼らの常識だけでは補完できない知識など



山ほどあるだろう。

（だからこそその冒険者っていう選択肢だったんだけどなあ）

一応、村で得た知識ではこの世界のレベルは今の自分…つまりLV33でも十分やっ  
ていけるということだった。それどころかかなり強いレベルであるらしい。

しかし、これは村人の私観だ。一日中畑を耕している彼らより、冒険者という強さを  
第一においたもの達の意見のほうが万倍参考になることには間違いない。間違いない  
のだが…

（中にいる冒険者を見る限り弱そうだったな…あれのせいで村人達の話が信びよう性を  
おびてきたしな）

LV33などユグドラシルプレイヤーであれば瞬殺できる。だからこそ村人の意見  
は話半分に聞いていた。しかし、平均的な冒険者があれかあ…とかなり微妙な気持ちに  
なったことを思い出す。

最上位のアダマンタイトという位にいる冒険者なら違う感想を抱いたかも知れない  
が、どうやらこの国にはいないらしい。他の国の王国、帝国、竜王国などにはいるら  
しいが。

それなら、なおさら聖王国で冒険者になる必要は皆無であるので、冒険者組合が鈴木  
悟のなかでスルー案件なのは間違いない。

しかし、聖王国で会った冒険者が弱すぎてこの世界の強者のデータが計れないことはデータが不足しているという不安につながる。そのことが、超がつくほどの慎重派鈴木悟に一人旅への決心を鈍らせる。

（はあ…：せめてモモンガのステータスでこつちにこれたらなあ。こんなに慎重にならずに済んだのに…）

他人など信用ならないのだから、自分一人で生きていける様にしなければならない。植え付けられたトラウマがその思いを大きくし焦らせる。

「よし…：考えても仕方ない。取り敢えず村に謝礼を渡したら、この国をでよう。まずは魔法技術が発展しているらしい帝国で色々、周ってみるか」

鈴木悟らしくない楽観的な決定を下したと同時に部屋のドアがノックされる。

完全に油断していたためにテンパってしまい、どうすべきか数秒迷うが、落ち着いた調子でどうぞと返事する。

骨の体は平静を保つのに向いている。とこの時ばかりはありがたく思う鈴木悟。

部屋のドアを開けて入ってきたのは、カルカ・ベサーレス。

いるはずがない人物の出現に完全に心中パニックになる鈴木悟。態度にはおくびにも出さないが。

というのも王族というのは何をしても傍にいるメイドやらなんやらが行うのが普

通らしく、一人で何かをやることなど以ての他という空気感を短い関わりで感じ取れていたからだ。

そんな人物が呼びつけるわけでもなく自分の部屋に訪れる。どうぞといった手前玄関で止めるわけにもいかない。

結果、カルカが失礼します。と丁寧に部屋に備え付けられた椅子に座る。

王族が一人部屋に入ってきたことにも十分驚きだが、このカルカー1歳とは思えぬ美貌である。

大人っぽい顔というのもあるが、所作がいちいち美しい。

骸骨になっていなかったら。その美貌に押されて不審者を絵にかいたような挙動不審に陥っていたことは容易に想像できる。

(立てば芍薬。座れば牡丹。歩く姿は百合の花。だったか？この娘のためにあるような言葉だな)

鈴木悟のもてうる最大の賛美表現でその可憐な少女を褒め称える。

ちなみに賢者モードの様に冷静なのは一回精神沈静化が起こされているからである。

(俺はロリコンではない……決してロリコンではない！俺の中のペロロンチーノさんが非常に悪い顔してる！畜生！最終日に来なかつたくせになんていい笑顔だ！しかし、美少女が部屋に入ってきただけで精神沈静化って先が思いやられるな。まあ、もうあれはな

いから暴発の危険性はないが)

実戦未使用でなくしてしまった相棒を思い浮かべ、悲しみを増す鈴木悟。

ここまで感情がコロコロ移動したのは、転移後初かもしれない。それはそれで嫌だが。

「えーと。カルカ様どうしてこちらに？見たところ、世話係なども居られないようですけれど？」

「世話係のメイドは今は連れてきてはいません。ですが、今はグスタヴスが外で待機していますので一人というわけではありませんよ」

カルカがニコリと笑い愛想の良い顔で返答する。

「ああ、そうでしたか。それは失礼しました。」

モモンはさらりと了解の意を伝えるが、内心少し焦っていた。

モモンガのアバターの時からガチの編成ではなかったため、どうしてもステータスには隙が多くなる。感知能力もそのひとつだ。暗闇を見渡したりレベルの低い〈透明化〉ぐらいは看破できるが、気配を感知するなどの能力は持っていない。モモンガの時は魔法でその隙を埋めていたのだが…

(グスタヴスっていうと、護衛の一人だった奴か。あのレベル帯のやつが近くにいますとすら気づけない…これはかなりのディスプレイアドバンテージだ)

大きく見積もって、LV30程度だった男の顔を思い出す。あのレベルの人間にすら不覚をとるのだ。これがプレイヤーであることを想定すると頭が痛い。

「本題がまだでしたね。私がなぜこの部屋に来たかということですが…簡単なことです」

くすりと笑う目の前の少女に緊張感を高める。

(なんだなんだ？俺が何か粗相をしたか!?それとも、もつとやばいことか!?俺がこの世界の人間でないことに気づいているとか!?この子やたら質問してきたからな)

体に力を入れ、窓の位置などを確認する。この世界は今の自分には油断ならない。自然と警戒心を強める。

「モモンさんとお話に来たんですよ」

「はい?」

だからこそ、目をキラキラさせてそう言い放つ少女に困惑した声をあげてしまう。

「あー言葉が足りませんでしたね…えーと、私にモモンさんの冒険譚をもつと聞かせてくれないでしょうか!」

「そんなことのためにわざわざ来られたのですか?」

モモンの呆れともとれる返答に、カルカが少し恥ずかしそうにをもしもじしながら弁明する。

「わ、私は王族として広い世界が知りたいんです。これは立派な王族の務めです。」  
「は、はあ…そういうものですか」

鈴木悟は納得いつていない声色のままカルカの弁明を受け取る。しかし、これは仕方のないことと言えよう。22世紀に生きた鈴木悟と異世界のローブル聖王国で生きるカルカ・ベサーレスでは情報…重要ではない部類だが、娯楽創作等の価値が全然違うのだから。

22世紀において創作物を閲覧することはそこまで難しいことではない。無料もしくは軽微な金額で行うことが出来る。

しかし、ローブル聖王国…もといその周辺国家ではそうもいかない。この世界の創作物の主なものに英雄譚があるが、それは語り手、もしくはごく少数の本からしか得られない情報だ。

インターネットもないのだから、得られる情報もほとんど同じようなものばかりになる。

カルカにとって、モモンの英雄譚を聞きに行くという行為は、王族にとってはあまり好ましくないが、この世界の人間ならまあ理解できる範疇の行動である。

しかし、そんなことを知らない鈴木悟は

（え…わざわざ、俺のあの冒険を聞きに来たのか？お姫さまって暇なのか？それとも俺

が気づけないだけで、何か裏があるのか!?)

疑心暗鬼になっていた。

そもそも、今の鈴木悟は軽く人間不信に陥っているのだから、そうなるのも仕方ないが。

(俺の話を聞きに来ただけとか絶対嘘だ! なにかしら、思惑があるんだろう…それが、何か分からない今は注意しながらあちらの要求に応えるしかない!)

さまざまな勘違いの結果ではあるが、鈴木悟は面倒くさすぎる自己問答に入る。

「あの〜ご迷惑だったでしょうか?」

固まってしまったモモンにカルカは、不安そうに上目遣いで尋ねる。

狙ってやったのではないだろうが、その行為に一般的な男は罪悪感を感じてしまうだろう。

勝手に警戒心を上げている鈴木悟は、その可愛い行為に目はいかなかつたので、単純に相手を待たしてしまつたことを詫げる。

「いえいえ、迷惑などではありませんよ。ただ、なんの話をすれば良いか迷っていたので…」

「でしたら!!モモンさんが住んでいた国の話をしてください! どんなどころだったんですか?」

苦し紛れの時間稼ぎであったが、こう反応されてしまつては話さないわけには行かない。

「えーと、私の住んでいた国はヘルヘイムというところでした。基本的に毒の霧や濃い雲に覆われた不毛の地でしたが、私の住んでいた…地域のナザリックは豊かなエリアでした」

勿論、自分のことについて話す経験などそうそうない鈴木悟は、つつかえつつかえであるが話を進める。ユグドラシルでの話を元にはぼー00%フィクションである点も話の進むスピードを遅くしているがそこは仕方ないだろう。

「モモンさんはその国ではどんな職業に就いて居られたのですか？」

サラリーマンです。とは言えるはずもない。

「あー、私は冒険者ギルドの一員でしたね。こちらの冒険者とは違い、多くのダンジョンに宝を求めました」

「ダンジョンで一番大変だったところはどこでした!？」

「氷のスルトという敵が強くて厄介でした。私のパーティーにとっても強い騎士と魔法詠唱者がいるんですが、この二人がダンジョンの前で揉めたというのも大変な原因の一つでしたね」

「えっ!?!なにがあつたんですか?」



最初はつつかえつつかえで、言葉も少なかった語り口がどんどん饒舌になっていく。楽しくなってきたのだ。自分とギルメンとの思い出を語れることが。

あんなに、失望したというのに。『可愛さ余って憎さ100倍』とはよく言ったものだ。

本当にギルメンが好きだったからこそ、裏切られたと思った時その分憎しみに向いてしまったのだろう。

（彼らを憎んでも彼らに会えることはないだろうに…それに彼らだってみんながみんな最初から来なかったわけではない。今のご時世は忙しい。暇がなかった可能性だって十分あっただろう…）

鈴木悟は自分のなかのギルメンへの怒りがなくなっていくと感じる。

もし、ギルメンを憎み続けていたら…別の対象に憂さ晴らしをしていたかもしれない。ギルメンと会う確率は非常に低いであろうから。

あの最終日のことはトラウマとして長い間鈴木悟のなかに残り続けるだろう。それは間違いない。

しかし、憎しみなどの負の感情が早いうちに取り除けたことに鈴木悟は安堵した。

（そうだ、この世界を楽しむことだってできるんだ。ネガティブなことばかり考えていたが…この世界は知らないことがいっぱいだ。その分危険だが、色々冒険すればいいん

だ！俺はアンデッドなんだから時間をたつぷりかけて警戒すればいろんなどころに行くはずだし）

まるで、思考のもやが取れたような清々しい感覚だった。

ちなみにカルカに話している内容は興が乗ってきてまだまだ佳境に入りそうにもない。

最初は困惑していた鈴木悟だったが今はこの時間が少しでも長く続いてほしいと思ったりしていた。

・  
・  
・

時は少し遡り、モモンが冒険者組合を訪れていたころ

（あれ？どういふことかしら？）

今までとは異なる違和感にカルカは疑問を覚える。

モモンから漂っていた通常では感じられない感覚。それが消えているのだ。

（さつきまで感じていた猛獣と対峙しているような感覚…言葉では説明しにくいあれが完全に感じられないわ）

やはり、自分の勘違いだったのだろうか？周りはカルカとは違い、モモンの存在に違和感を覚えていなかった。

（でも、本当に気のせいならこんなに急に消えるかしら…）

モモンに最後に対面したのは馬車に乗る前。その後の移動と現在の冒険者組合訪問など時間はある。この間になにかしらした結果、モモンから発せられていたオーラが弱まった。ということだろうか？

(もし、そうだとしたらアイテムか魔法よね…まさかあの見た目で魔法は使えないだろうし、アイテムという線が濃厚ね)

もし、アイテムであの強烈な気配を隠したのであれば現在の状況にも納得がいく。

しかし…

(だとしたら、アイテムで隠したものはなんなのでしょう?)

名探偵のように状況証拠から、現在の自分の感覚の変化について説明を導き出している。

実際、冒険者組合に手練れがいることを警戒した鈴木悟が気配を隠す指輪を装備したというのが、カルカの推理の正解にあたるので、カルカの推理はかなりいい線をいつていた。

そして、推理を突き詰め一つの結論を導き出す。

(もしかして…!)

冒険者組合から出てきて、自分達の馬車に近づくとモモンの姿を凝視する。

これなら…確かにそれなら説明がつく…!カルカは自分が出した答えが正解にたど

り着いているであることを確信する。

（もしかして…モモンさんはとんでもない実力の持ち主!? 普段はそれは隠さずに放出しているけれど、今は人が多いところに向かうからアイテムを使って隠している…。これなら説明がつく!）

厨二病かな? 現代人が聞いたら即このレスが帰ってくるような結論である。

だが、カルカが生きる世界には魔法やモンスターがあたりまえの様に存在しているのだ。

この、＼とんでもない力を普段は封印している＼設定も案外馬鹿にできない。

まあ、モモンの冒険譚に多少触発されてしまったのだろう。そういう路線に妄想が及んでしまうことは思春期には珍しいことではない。

ただ、カルカの優秀な頭脳が推理した結果、若干現実味を帯びてしまっているのはたちが悪いが。

厨二病のテンプレともいえるこの結論に、カルカの疑念は一応の収束をみた。

モモンと関わるうえで最大の障壁になっていたことが取り除かれたのだ。自然とカルカはモモンともっと関わりたいという方向に考えがシフトする。

（さっきの英雄譚をもう少し聞かせてくれないかしら…刺激的で凄く楽しかった。それにモモンさんに直接、＼隠された力＼の説明も聞きたいし）

警戒心の緩んだカルカは、一通り用事が済んだらモモンに話を聞きに行くことを心のメモ帳に書き込んだ。

：

そして、現在に至る。

モモンの話す内容はどれも刺激的で世界が広いことを教えてくれる。

最初は純粋な興味だった。モモンという遠い国の住人の知識を聞きたいだけだった。

(でも、もしかしたら…彼は私の夢を叶えるためのキーパーソンになりえるかもしれない)

新鮮な知識を濁流のように話すモモンを見ながらカルカは、思う。

話が佳境に入り、そして終わる。これだけのエピソードもこの男にとっては小話のひとつに過ぎないのであろう。

「モモンさん」

静かだが凜と通る声で、名前を呼ぶ。

「はい？どうされました？」

いきなり、声のトーンが変わったからだろうか？モモンは訝しげにそれに答える。

カルカが大きく息を吸う。

「私には夢があります」

モモンは黙ってこちらを見据えている。ヘルムの下の顔を想像することはできない。興味を持つているかもしれないし、持っているかもしれない。怪しんでいるかもしれないし、怪しんでいないかもしれない。

こういうときに顔が見えないのは緊張するな。と考えながらも話は進める。いまさら引つ込みはつかないのだ。

「弱き民に幸せを、誰も泣かない国を」

言葉を短く切り、間を空ける。話しかたひとつひとつにカルカの能力の高さが伺える絶妙な間であった。

「これが私の信念です。幼いからこそその無謀な理想と思われるかも知れません。ですが、わたしはこの理想を捨てたくありません！」

「そうか…理想をすてないか…それは、とても大事なことではないでしょうか？その理想を達成するために努力を惜しまない姿勢。尊敬に値します」

モモンは本当に感嘆したという調子で、そして少し悲しそうにカルカの夢へコメントする。

それを聞いたカルカは本題はここからだ、膝に置いている拳を握り締める

「モモンさんにはその夢を達成する手助けをしてほしいのです」

「えっ!?!」

突撃の勧誘にモモンは慌てふためく。関係ない話だと思っていたのにいきなり当事者になった。そう言って空気を感じられる。例えるなら突然、授業で指名された生徒と行ったところだ。

「え、いやー私がカルカ様を手助けすることなんてできるとは思いませんが…」

「そんなことはありません！」

今までしつとりとした声で話していたカルカの口調の勢いが強くなる。

「失礼しました…そんなことはないですよモモンさん。あなたの豊富な知識は大きな力です。どうか私の助けになってくれないでしょうか？私の理想は夢物語のような雲を掴むような…そんな話。それを将来、達成するには多方面の知識は不可欠なのです。どうかお願いします！」

「…事情は分かりました。ですが、そもそもカルカ様は王ではないのですよね？でしたら、私がここにいるにも意味がない気がするのですが…」

「…それはそうですね。モモンさんの話を聞いている間に勝手に盛り上がっていたみたいです…ただ、モモンさんの能力は私の理想を叶えるために本当に必要だと思いません。それでつい先走ってしまつて…」

「いえいえ、謝ることはないですよ。ただ…そうですね…」

モモンは手を顎に持っていき思案する。考え込んでいる時点であまりいい返事は期

待てできないように感じる。彼は冒険がしたい。最初からそう宣言している。

国政を手伝うということは、国に仕えるという事。つまり、それはひとつの国に縛られるという事でもある。

もし、自分が王になればある程度融通は利かせられるかもしれないが、現時点で国に仕えてもらうのであれば、既存の軍に参加することになる。

確実に自由は縛られる。それを聡明な彼が分らないはずがない。

「うーむ。やはりこの申し出、今はお断りさせていただきます。」

やはりか。カルカは表面に出さないように努力するが露骨にがっかりする。

その、様子を見てかモモンが間を凶って言葉を続ける。

「ただ、今後については少しその選択肢をも考慮に入れておきたいと思います。」

「えっ!？」

モモンの引つかかるような宣言にカルカは顔を上げる。

「やはり、私は冒険がしたい。この気持ちに変化はありません。ですが、カルカ様とお話して、思ったんです…カルカ様の目標を補佐するのも悪くはないかなって。ですが、私は見ての通り頭脳労働者ではありませんので、本格的なことはできないでしょう。それでも相談役くらいなら問題ないと思います。」

「つまり、私の提案を飲んでくださるということですか？」



「はい。ただひとつ条件があります。」

モモンがひとさし指をピンと立てる。カルカはごくりと唾をのみ、そのモモンがいう条件を待つ。

「“今は”といったことで察せられると思いますが、条件はカルカ様が王になることです。」

私はカルカ様が王になるまで冒険をしてきます。もし、カルカ様が王になられたのなら私は“騎士モモン”としてあなたに仕えることをお約束しましょう」

「まあ、まるで私が王になるのが難しいと考えているみたいですね」

カルカが意地の悪いことを冗談ののように言う。

「これは失礼しました。」

「いえ、実際私が王になることは難しいでしょう。私は女ですから。ですが…私はこの国の王族です！民に安寧をもたらすことが王族の務め…それを果たすために私は王になりましょう！…私が王になったらよろしく願いますね“騎士モモン”」

「ははは、まだ“騎士モモン”ではありませんよ。しがたない一般人です。…ですがそうですね。そうなることを楽しみにしていますよ」

その恰好で一般人は無理だろ。とつつこみたくなるが、鈴木悟という人格は一般人のそれに間違いない。

ふふふ、と機嫌良さそうに笑うカルカと鈴木悟。不意に何かを思い出したカルカが笑いを止める。

「そういえばモモンさんって封印されし力とか持ってます?」

「ぼふう!!」

突然の質問にせき込むモモンをみてカルカは察する。やはり、自分の考えに間違いはないようだ

「え〜と?」

「いえ、何でもありません。大丈夫です。突然、おかしな質問をしてしまつて申し訳なかったです。今日は、実に有意義な時間を過ごすことができました。これからもよろしくお願いします」

「あっはい」

カルカはぺこりと頭を下げ部屋を後にする。

カルカがいなくなり再び部屋に一人になった鈴木悟。カルカの突然の質問に呆然としていた。

「もしかして…俺がプレイヤーだつてばれてる?」

?おまけ?

## ①・カルカとの対談中の鈴木悟の心情

(でも、もしかしたら…彼は私の夢を叶えるためのキーパーソンになりえるかもしれない)

「モモンさん」

「はい？ どうされました？」

(なんか、真剣な顔になったぞ。嫌な予感がする)

「私には夢があります」

(ん？ この感じ。なんか経験あるぞ…なんだっけな…そうだ！ 課長が無理な仕事を押し付けてくるときのテンションだ！ いやまさか、異世界まできて変な仕事を押し付けられるなんてことはないだろう…ないよね？)

「『弱き民に幸せを、誰も泣かない国を』」

(おぉー。いいこと言うなこの子。しかし、恐ろしいくらい落ち着いた子だな。王族ってみんなこんな感じのかな？ でもまあ、実際国の運営って大変そうだしこれくらい賢い子が王様になったほうがいいよな)

「これが私の信念です。幼いからこそその無謀な理想と思われるかも知れません。ですが、わたしはこの理想を捨てたくないんです！」

(まあ、『誰も泣かない国』ってのは言葉のあやで幸せな国を作りたいってことでしょ？

そんなに無謀なのかな…？確かに難しそうだが)

「そうか…理想をすてないか…それは、とても大事なことではないでしょうか？その理想を達成するために努力を惜しまない姿勢。尊敬に値します」

(俺も理想を捨てないで頑張っていれば、最終日をみんなとすごせてたのかなあ。しかし、是非とも彼女には夢を叶えるべく頑張ってほしいな)

「モモンさんにはその夢を達成する手助けをしてほしいのです」

「えっ!?!」

(ふあ!???)

「え、いやー私がカルカ様を手助けすることなんてできるとは思いませんが…」

(おいおいおい！絶対無理だよ国の運営に関わるって！)

「そんなことはありません!」

「失礼しました…そんなことはいいですよモモンさん。あなたの豊富な知識は大きな力です。どうか私の助けになってくれないでしょうか？私の理想は夢物語のような雲を掴むような…そんな話。それを将来、達成するには多方面の知識は不可欠なのです。どうかお願いします!」

(豊富な知識って…ギルド運営とかならまだ知識をあげられそうだけど…現実の国ってなにしているんだっけ？みんしゅしゅぎとか、なんとかなら知ってるけど…正直、無理無

理かたつむり！なんとか体よく断らねば…そうだ！

「…事情は分かりました。ですが、そもそもカルカ様は王ではないのですよね？でしたら、私がここにいても意味がない気がするのですが…」

（確か、まだ王様じゃなかったはず！小さい娘を傷つけるのは良心が痛むからこのくらいで引いてくれればいいが…）

「…それはそうですね。モモンさんの話を聞いている間に勝手に盛り上がっていたみたいです…ただ、モモンさんの能力は私の理想を叶えるために本当に必要だと思っんです。それでつい先走ってしまっ…」

（そうだぞ！少し落ち着きなはれ！しかし、こんなに褒められるのは悪い気はしないな）  
「いえいえ、謝ることはないですよ。ただ…そうですね…」

「うーむ。やはりこの申し出、今はお断りさせていただきます。」

（そんながっかりしないでくれよ…こんなおっさんよりもつとやくに立つ人間なんのでいっぱいいるって。俺もう人間じゃないけど。なんか…いい感じの折衷案があればいいんだが）

「ただ、今後については少しその選択肢をも考慮に入れておきたいと思います。」

（まあ、取り敢えず時間を稼ごう）

「えっ!？」

モモンの引つかるような宣言にカルカは顔を上げる。

「やはり、私は冒険がしたい。この気持ちに変化はありません。ですが、カルカ様とお話して、思ったんです…カルカ様の目標を補佐するのも悪くないかなって。ですが、私は見ての通り頭脳労働者ではありませんので、本格的なこととはできないでしょう。それでも相談役くらいなら問題ないと思います。」

（正直、そんなに責任が重くなければこの国で生活するのも悪くないかなって思っている）

自分もいるわ…俺には無限に近い時間があるからいろんなことができる！それを気づかせてくれたのはこの娘だしな。でも、政治的アドバイスはむりだぞ！いやまじで！）

「つまり、私の提案を飲んでくださるということですか？」

「はい。ただひとつ条件があります。」

モモンがひとさし指をピンと立てる。カルカはごくりと唾をのみ、そのモモンがいう条件を待つ。

「今は」といったことで察せられると思いますが、条件はカルカ様が王になることです。

私はカルカ様が王になるまで冒険をしてきます。もし、カルカ様が王になられたのなら私は「騎士モモン」としてあなたに仕えることをお約束しましょう」

(女性が王様になるのは難しいって聞いたことがある…それにまだまだこの子は小さいから王様になるとしても結構先だろきつと。この条件、結構いいんじゃないやね？俺も冒険できるしこの娘も王様になるために努力するだろうし。てか、大きくなったら別に俺はいらなくね？って気づくかもだし)

「まあ、まるで私が王になるのが難しいと考えているみたいですね」

(うお!!気づいてるやん!心読めるの?心読めるの?)

カルカが意地の悪いことを冗談ののように言う。

「これは失礼しました。」

「いえ、実際私が王になることは難しいでしょう。私は女ですから。ですが…私はこの国の王族です!民に安寧をもたらすことが王族の務め…それを果たすために私は王になりましょう!…私が王になったらよろしく願いますね「騎士モモン」」

(あー!!俺が格好つけてした宣言を流用しないで!正直、結構恥ずかしい!)

「ははは、まだ「騎士モモン」ではありませんよ。しがない一般人です。…ですがそうですね。そうなることを楽しみにしていますよ」

(ここは大人の余裕で効いてませんよアピールしとこ)

「そういえばモモンさんって封印されし力とか持つてます?」

「ぼふう!!」

(中二病か!!…いやまてよ、この質問つてもしかして…)

「えくと?」

「いえ、何でもありません。大丈夫です。突然、おかしな質問をしてしまつて申し訳なかつたです。今日は、実に有意義な時間を過ごすことができました。これからもよろしくお願いします」

「あっはい」

(えっ? えっ? まつて? まつて? ん?)

「もしかして…俺がプレイヤーだつてばれてる??」



## 騎士と王女の日常 ③オセロ

「失礼しまーす」

ドアノブを乱暴に回し入室する黒い全身鎧。勿論、モモンのことである。普段の何気ない一動作であるため、自然体で、放課後の学生の様なけだるさすら感じられる。

モモンが雑な動作を王城内で行うのは珍しい。王城はモモンにとつては職場であるため、サラリーマンだった時の会社に等しいといっても過言ではない。無意識に肩に力が入ってしまう場所だ。では、なぜ付け足したような入室の挨拶に礼を払う気のない態度でいるのか。

答えは簡単で入室先の部屋には誰もいないからである。

会議が開始されるのは30分後。ビジネスマナーで言えば集合するのは、常識の範囲内の前行動だ。会社によっては少し早いブラックス☆企業が鈴木悟がリアルで所属していた会社では皆、これくらいには集まっていたのである。察してほしい。

ちなみにこの世界ではそういった概念はない。基本的に皆、定時に集まる。

ごく、たまに几帳面な性格のものが早めに集まるがそれでも、15分より前に集まるものはそうはいない。

ちなみに聖王国のメンバーではパベル・バラハが10分前には集合するし、ケラルト・カストディオは15分前には来ていることもある。

その逆に遅いメンバーとしてはレメディオス・カストディオ、オランダ・カンパーノがいるが、2人とも聖王女が参加する会議には遅刻はしない。

だが、それ以外の会議では間に合った試しがないという猛者だ。

そう、モモンの経験上誰も部屋にいるはずがないのだ。

「おーモモン。いつもこんなに早く来てるんだな。お前より早く部屋に来たことは初めてかもしれない」

「こんにちは。レメディオスさん。今日はかなり早いですね。なにかあつたんですか？」

なんと、いるはずのない人物がいる。これにはモモンも精神沈静化を受けるほどの驚愕だった。そのおかげで、なんなく返答をすることができたのだが……

部屋の椅子で片足を交差させている人物。レメディオス・カストディオ。

本日の会議ではカルカが来ないので彼女が時間内、それもモモンよりも早く来ているというのはいえざることだった。

(なぜ、この時間にここに……それよりもあの間の抜けた入室は聞かれてたりして感じるか? こいつ、妙に俺にあたり強いからそういうの聞かれたくないんだよなあ)

「別に何かあったというよりも、何もなかったから早く来たただけぞ」

レメディオスが面白くなさそうな顔でモモンの質問を返す。

「…いや、今日は聖騎士団の予算の使用用途の会議ですよ？資料なりなんなり、用意するものも結構あるでしょう？」

「そうなのか？そういうのはあいつらに任せてるから、私の仕事はないんだなこれが」

レメディオスはドヤ顔で言い切るが、自分がトップの組織なのだからもう少し仕事に  
関われよ…という思いしかわいてこない。

きつと、こいつを仕事に関わらせるよりも自分でやった方が早いと現場の人間は結論  
出してるんだろなあ。とモモンは残念な子を見る目で、レメディオスを見る。

（トップが馬鹿だと組織は苦労するんだよなあ。現場にそのつけが帰ってくることは少  
なくないし…俺の会社の上役はどうだったんだろなあ…無茶な注文は多かったが馬  
鹿ではなかっただろうし…だよな？こいつよりましか？）

モモンは二人の副団長の労を今度労ったほうがいいと心のメモ帳に書き込んだ。

「ところで、入室の時の挨拶が腑抜けすぎなんじゃないか？今は私しかいないが、聖女王  
様をご入室されている状況なら失礼にあたるだろう？」

（やつば、聞かれてたかあ!!てか、早速上げ足取ってきましたよ！俺こいつになんかした  
かなあ？）

「それは、確かに気が緩んでいましたね。以後気を付けたいと思います…ですが、聖王女様は公務の都合上、時間通りにしか来ませんよね？この時間に来ていることはないのでは？」

「…そうだとしても、国のトップに近いお前がそんなたるんだ態度をとるのは良くないだろう！普段からしつかりせねばな!!」

「5分前ですよ」

「うん？」

モモンの眩きに、得意顔だったレメディオスの顔が疑問の表情を浮かべる。

「ですから、聖王女様が入室するのは会議の5分前丁度です。私は毎回、早めにきているので知っていました。が、レメディオスさんは知らなかったのですね？普段からしつかりしなければなりませんね」

見事に一本取られたレメディオスの顔が怒りやしてやられた恥ずかしさから朱に染まる。

「貴様！馬鹿にしているのか!!」

レメディオスが机を激しい音を立てながら、立ち上がりモモンを睨む。幸いこの部屋は防音なので外に音が漏れることはないだろう。

「いえいえ、馬鹿にしているわけではなく私からあなたへの注意です。それと、私とあな

たは立場上同格です。あまりこちらを下に見るような言動は慎んでください。こういった部下がいらないところでは良いですが…公衆の面前でお前呼びなども良くありません。そういった意味を込めた注意です」

早口でまくしたてられたレメディオスがぼかんとする。本当に意味を分かっているのだろうか？

レメディオスは、なぜかモモンにつつかかるので前々からモモンとしてもレメディオスにヘイトは溜まっていたのだ。いつか、注意しようと思っていたがなかなかチャンスがなかったのだった。

(こいつの部下の前で注意するのは、デリカシーに欠けてるからな…そういうったことを踏まえると今が注意の絶好の機会だったわけだ！決して、こいつうざすぎ…とか思ったわけじゃないよ)

「よく、分からんが言い過ぎたみたいだったな。すまない」

「いえいえ、分かってくれたのなら良いですよ」

(こいつ、素直に謝れるんだなあ。意外)

さらに、反抗してくるかと思つたが自分がやり過ぎていたという自覚はあるらしい。枕言葉の「よく分からんが」のせいでそこはかとなく不安だが。

「…」

「…」

モモンも適当に席につく。その後はお互いに話さないので沈黙の時間が流れる。

通常ならそういった空間は気まずいので、どちらかが間を持たすために仕事の話なり、無難な話を振るものだが…

人類最強クラスの實力をもつふたりにそう言った問題は眼中にない。そういうことなのだろうか？と納得してしまうほど、二人ともふてぶてしい。

（こいつなんか話振ってくれないかあ！気まずいじゃん）

片方は本当に見てくれただけだったのだが。

（只得さえ、女性と二人きりってなに喋っていいか分かんないんだよなあ。しかも喧嘩？した後だし…こつちからなんか話題を提供すべきか…？げっ！あと、27分もあるじゃん！）

「なあ、モモン。おm…モモンはカルカ様とよく遊んでらっしやるんだろ？どんなことしてるんだ？」

内心あたふたとしているモモンにレメディオスが声を掛ける。

「うーん。そうですね…昔はオセロなどやりましたが、最近だとケラルトさんも交えて大富豪とか人生ゲームとかやってますね」

「どんどん、運要素が強いゲームになっているのはどんどん勝負にならなくなっていく

のを悟られないようにシフトしていったためである。

(多分、俺がまあまあ馬鹿つてことはカルカには悟られてないはず…ケラルトさんは…あの人は微妙だな。底知れないんだよなあ)

Bannon!

またしても、机を強くたたたく音にモモンは考え事を放り出し音の発生源をに目線移動す。

が、振り向いた時には目の前にレメディオスが立っていた。

「おい！そのうちどれかやらないか!？」

「えっ!?今ですか?ちょっと時間ないんじゃないかって思うんですけど…」

「今、やらないとモモンがだらしない態度で会議室に入ってきたってカルカ様に報告するぞ!」

レメディオスがカルカを引き合いに出し、モモンを脅す。正直、レメディオスの脅し自体は痛くも痒くもない。カルカとも8年の付き合いになる。そんなことで怒ったり失望したりすることはないだろう。

(いや…カルカは俺のこと買い被り過ぎている節があるからなあ。まあ、流石に大丈夫だと思おうが)

この脅しを恐怖し、レメディオスの条件に乗ることはあり得ない。しかし、この時モ

モンに一つの感情が芽生える。

「レメディオスをボコボコにしてみたい」

正直、今レメディオスとモモンが真剣勝負をすることになれば泥仕合の末に体力の差でモモンが勝つだろう。攻撃力が伴わないだけで、守備力、体力はプレイヤー基準なのだから。

しかし、頭を使うゲーム。例えば、オセロならボコボコにできるんじゃないか…ということだ。

日ごろのストレスが発散しきれてないモモンがこの考えに至ったのは必然だろう。

「まあ、時間がないので一回だけでしたらいいですよ」

「本当か!!」

レメディオスの顔がパアアと明るくなる。

（うう…そんな曇りない眼差しで喜ばれると少し良心の重癪があるな。まあ、ボコるのは変わらんが）

モモンの日ごろの恨みは意外に深かった。

「では、オセロをしましょうか」

「おういぞー!」

「ルールはカクカクシカジカで結果、盤面に残った色が多い方が勝ちです」



「はへー。これはこうじゃないのか？」

「いやだから、そうなるとうこうしないと終わらないじゃないですか」

——10分後——

「だ・か・ら！色は2色しかないでしょう!?ここに置くと黒は白に挟まれて反対になるんですよー！」

「????」

「ルール説明でこんなに時間ってかかるの……」

まさしく、ぬかに釘、のれんに腕押し。悲しいかな、モモンはストレス発散をしようとしてさらにストレスを貯め続けるという状況に陥っていた。

「こんにちはー。あら、モモンさんはいつも通りいるとして……姉さま居られたのですか？」

部屋に入ってきたケラルトは、うなだれるモモンと間のぬけたレメディオスの顔。そして、その間に置かれたオセロのゲーム盤を見て全てを悟った。

「あつー！とつてこないといけない資料があるのを忘れてました。それでは、また後でお会いしましょうー」

その瞬間、逃走を選ぶ。どういいういきさつか知らないが姉に戦闘以外のことを教えるなどチンパンジーにジャズダンスを教えるよりも難しい。

妹である自分是要領を得ているから、教えることはできるが正直面倒くさい。関わらないのが一番である。

「ちよつと、どこにいくんですか？助けてくださいよ…」

しかし、この男がそれを許さない。

モモンが1v33戦士職の動きを凌駕したスピードでケラルトの手を掴む。

状況だけで言えば、90年代のメロドラマの様だ。ケラルトは苦虫を潰した表情をモモンは鬼気迫る表情であるという違いはあるが。

「えーと、モモンさん…早くしないと会議に間に合わないの…離していただけですか？」

「今日の会議は神殿側は、承認の決に応じるかどうかなので、書類は必要ないはずですよ。逃がしませんよ。」

「それは、非常に困りますね…私は逃げるわけではなく、資料を取りに行くんですから邪魔はしないでいただけます？」

「まだ、そんな言い逃れをしますか…仕方ない。レメデイオスさくん！私とケラルトさんのどちらの説明がわかりやすいと思いますく!?」

モモンがレメデイオスに問いかける。勿論、ケラルトの手はがっちり掴んだままである。

ケラルトは目を見開き、モモンを睨む。モモンはふつと笑う。それは勝利を確信した笑みだった。

「ちようど良かったケラルト!!モモンの説明が分かりにくくてさ〜!教えて!」

「モモンさん…これは貸しですよ…」

「すみません…お願ひします」

レメデイオスに向かっていくケラルトの目は優しく、殉教者の様な澄んだ瞳であった。

## 街

大勢の人が行き交い、露店の叩き売りの怒号が飛び交う。

今まで鈴木悟が歩いてきた聖王国―王国間の道とは違い、人の営みが絶えない。

道路は舗装が行き届いており、文明の色が所々に感じられる。

「……」が王都か……

ここは、リエステイーゼ王国。王都エ・レイブル

鈴木悟は転移直後から変わらず、黒の全身鎧に身を包んだ格好だ。

（やっぱ、人が多いとこの格好を二度見してくる人も少なくなってきたな。ガン見されると精神衛生上、良くない……疲れるからね）

王都到着直後であるが、鈴木悟はかなり満足していた。

道中は草原やちよつとしたモンスターに大興奮だったが何km、何十kmと同じ光景が続いていたので飽きていたのだ。

（人ごみも前の世界だとイライラのもとにしかならなかったけど、この世界でみると違うもんだな！できることなら昼頃につきたかったが贅沢は言うもんでもないな）

時刻は夕刻。この世界の人間の一日は終わるのが早いので、もう店仕舞いに取りか

かっている店も少なくない。

それでもなお、この雑踏に鈴木悟は満足を深める。

(よし！珍しいアイテムがないか露店を物色するとするか！)

鈴木悟は重たい全身鎧をもともせず、小走りで駆け出した。

――

「うーん。明らかにこれは、冷蔵庫だよな？」

時刻はすでに夕刻である。鈴木悟の歩く道は昼間の賑わいが嘘の様に静まりかえり、一人言も意外と大きく響く。

鈴木悟は本日の成果を確認しながら今夜泊まる宿へ向かっていた。

全身鎧の大男が小さなアイテムの扉の開け締めを繰り返す姿は、非常に滑稽と言う他ない。

まあ、その姿は誰にも見られていないのだから、そういった感想を気にすることはない。

∴通常の人間ならそう考えるだろう。

「それで、あなたはいつまで私の後を着いてくるんですか？」

鈴木悟は唐突に振り返り、曲がり角の場所を眺める。

眺めるというよりも、睨み付ける。スリット越しの視線はその追跡者への強い警戒を

表していた。

「やっぱり、バレてたか」

鈴木悟の見つめた先には、10—20代だと思われる男。

草臥れた青髪に草臥れた服を着た男だ。しかし、腰に佩いた剣とそれを支える体は鍛えこまれていて、線は細いが屈強な戦士を彷彿とさせる。

「結構な時間、私の後をつけていたみたいですが、あなたは私のファンか何かですか？」  
鈴木悟としては、初対面の男に追われる理由はない。

この世界に到着してまだ日が浅いのだから当たり前である。

警戒心むき出しの態度は気にしないともし言わんばかりに、青髪の男は飄々と返答する。

「まあ、気にはなつたという点ではファンかもな。だが、握手をしてくれと言いにきたわけではないぞ!!!」

男は脱力しきつた体勢から一気に距離を詰める。その速度は非常に速く、まだ剣に慣れていない鈴木悟はグレートソードを抜ききる前に接近を許してしまう。

しかし、勿論攻撃は喰らわない。最低限の動きで避け、その後後ろに大きく跳び距離を空ける。

「なにが目的なんだ？」

今度はグレートソードを構えて、いきなり襲い掛かってきた男を油断なく見据える。

「俺の名はブレイン・アングラウス：目的は強いて言うなら俺の強さの証明かな？」

「なにを言っているんだ？」

「お前も戦士なら分かるだろう？ 自分はどれだけ強いのか？ を試してみたいという気持ちだ。未だ無敗の俺の一撃を避けるような手練なら尚更だ」

戦士じゃないから分かりません。といたい。

というか注意したい。小一時間はしたい。

いきなり人に斬りかかるなど常識外れも良いとこだ。

「それで、道行く相手に喧嘩を売っているんですか？ 武者修行でもしているんですか？」  
「俺は敗北を知りたいんだ：だから、俺に勝てそうな奴に斬りかかる。それだけだ。お前は俺に勝てるのか？ ご立派な鎧をもっているから腕はたつだろ？」

鈴木悟がふうーと息を吹く。

それだけなら、集中しているのかと思わんでもないが、グレートソードの構えを解いたその姿はやれやれと言わんばかりだ。まるで、先達が世界の狭い童子にものを教えるような態度。

今までの緊張感が消え去ったかのような態度にギラギラした笑顔を浮かべていたブレインが表情を変え、訝しむ。

「どうした？とつとと剣を交えようぜ」

「ええ、良いですよ。先に断言しますが貴方は私に勝てませんよ」

いきなりの傲慢な宣言にブレインの眉間に皺が寄る。

「強気だねえ？それだけ自分の力に自信があると？」

剣の持ち手に血管の跡がくつきりと見える。馬鹿にされている。無敗の自分を下に  
見て、侮っている。目の前の全身鎧の態度はブレインを怒らせ、剣の持ち手に必要以上  
に力を入れさせているのだ。

「私は自分が弱い、大したことはない」と知っている。でも、貴方は自分より強いものはい  
ないと宣っている。世界が狭いんですよ貴方は」

「あああ??御託はいいんだよ!!」

ブレインがまたも鈴木悟に斬りかかる。

その速度はまさしく神速。冒険者に当てはめればオリハルコンは確実、アダマンタイ  
トでもおかしくはない。そう感じさせる動きだ。

それに対してモモンは剣を動かさそうとしない。だらんと力を抜いたままだ。

(なにもしない!!)

ブレインの射程に入る直前ですら、黒の剣士は両手のグレートソードを動かさない。  
先の傲慢な発言から、勝負をあきらめたとは考えにくい。ブレインは注意深くモモン



の両手を伺いながら、攻撃に移る。

その瞬間、黒の剣士の両手が動く。しかし、その手はグレートソードを握っていない。ブレインが疑問を感じたのは一瞬。そのコンマ一秒後：ブレインの視界は爆発した。最初は意味が分からなかった。ただ、肉体にダメージがないことを瞬時に確認したブレインは状況を確認するため、後ろに大きく飛び跳ねようとする。

無敗を自負するだけあり、冷静な状況の判断である。しかし、そのわずかな間に確かな質量を持つ物体がブレインの眼下から迫る。

その後のブレインの記憶は断片的であった。宙を舞う体。不安定な視界。謎の物質が衝突した胸の痛み。それらを感じつつブレインは地面に投げ出されたのだった。

――

「はッ!？」

ブレインは、仰向けにされていた体を起き上げる。どうやら気絶していたらしい。(…状況が未だに分からない。俺は負けたのか?)

最後の記憶は、大口を叩く黒の剣士と対峙したこと。その後、よくわからないまま飛ばされたこと。それだけであった。

「やっつと、起きたか」

絶賛混乱中のブレインに胡坐をかいた男が声をかける。勿論、そいつは自分と対峙していたはずの相手である黒の剣士である。

「…記憶があまりちゃんとしていないんだが…俺は負けたのか?」

「生命与奪の権利を握られたという意味では貴方の敗北でしょうね。気絶してる間は無防備でしたから」

黒の剣士は淡々と語る。どうやら、自分はこの男に敗北したことになるらしい。

「あんた…俺に何したんだ? アイテムを使ったのか?…まさかと思うが魔法か?」

全く状況の整理ができない。理由を聞かないことには、始まらないだろうと、まだ動かしづらい体を必死に相手に向けながら質問を投げかける。

「そんな、大層なものを使っていません。あれは、ねこだましと単純な蹴りですよ」  
「…ねこだましにけり?」

理由は聞いたがぴんとこない、蹴りは分からんでもない。

あんな立派な剣を敢えて使わないことは、良いフイントになる。ただ、それだけなら自分は捌けるはずだ。だが、結果はご覧の有様だ。つまり、もうひとつのねこだましが自分が土にまみれている理由になるはずだが…

しかし、ねこだましでなにかができる? たまに子供が遊びでやるような幼稚なものだ。技として殺し合いに流用できる代物ではないだろうに。

「子供のお遊びで俺を倒したと言ってるのか？」

「…？ねこだましのことですか？あれも極めれば立派な技ですよ。敵の視界をかく乱させ隙を作ることが出来る」

男の口調に嘘や欺瞞はなさそう。どうやら、本当にねこだましが決まり手らしい。

（あんな、幼稚なものを戦士の技術に昇華させてるってのか!!…こいつには敵わねえな）  
「ふっ…あんたみたいな強者がいるんだな。見てくれは知らないが、あんた有名な強者なのか？」

「名はモモンです。それと、最初に言ったでしょう？私は強者ではないですよ。あなたが私より弱いだけです。私より強者はごろごろいます。この世界にもいるだろうしな」  
どうやら、名の売れた存在ではないらしい。これだけ、強い存在が無名という事に疑いをもつがすねに傷があるものかもしれないし追及はしない。

状況的に殺されることはないと思うが、まだ体力は回復しきっていないのだから。

最後はボソボソ言っていて聞こえなかったが、こいつが弱者にカウントされるとは考えにくい。謙遜が過ぎると言ってやろうかと思ったが、辞めた。

曲がりなりににも完全に自分より上の実力を持った存在だ。黙って聞き入れるが吉だとブレインは考える。

「そうか…じゃあ、俺は次ぎ会うときにはあんたに剣を抜かせるぐらいには強くなって

いるとするよ」

「…え、次もあるの?」

黒の剣士モモンはげんなりとした調子で呟く

「そりや、そうさ。俺は今、生まれ変わった気分だ。あんたみたいな強者が世界にはいるってことが知れたからな!! さらばだ!!」

ビーチフラッグ経験者かな?と思うほどスムーズな動きでブレインが逃げていく。去っていく背中では毎秒小さくなっていくのでかなりの速度が出ているに違いない。

「…割と本気で蹴つたのにタフだなあ」

鈴木悟は呆れたというより、あまりの逃げ足の速さに感心する。ああいうタイプは長生きしそうだと思えない決めつけをしながら、嵐の様に去っていった男が消えた方角をしばらく眺めていた。

「ていうか、俺に剣を抜かせるって…絶対抜かない方が強い自信あるぞ」

—————

鈴木悟は、宿への道を行く。道中で珍客の来襲もあったため、予定していた時刻よりも遅くなってしまったが大したことはない。

この体は、食事も必要ないので宿の夕食の時間に合わせる必要もないのだから。

それが少し寂しい様な気もするが結局、便利だからいいか！という結論を出すのは、転移後何度もやった問答だ。

（昼に売ってたカフェエラートってやつ飲みたかったなあ）

しかし、市場は刺激が強すぎた。僧侶…今は即身仏の如く欲のない鈴木悟も心が揺れ動いているのを感じる。

（シューティングスターがあれば、選択肢はあるんだけどなあ。今は、骸骨一択だし…便利だからいいけど！）

「こんばんは」

後ろから唐突に声をかけられ、鈴木悟は振りかえる。しかし、ただ振り返るのではなく。いつでも撤退できる…そんな姿勢を作り相手を視界に入れる。

鈴木悟の五感…それは、当たり前前の話だが、モモンガのスペック準拠だ。これは普通の人間を凌駕する性能だ。

そんな鈴木悟が考え事していたにしても、全く気付かぬままに接近を許したのだ。ただ者ではない。

「こんばんは。いつからそこにいらっしやたの？」

白銀の全身鎧。自分と対になるような存在が目の前に立っている。

対峙するだけで分かる。こいつはやばい。ヤバすぎる。殺気というものに敏感であ

るはずの鈴木悟ですら感じるもの。これが死の予感と呼ぶものなのかはわからない。しかし、この目の前の存在がやろうと思えば、一瞬で自分はこの世界から消え去る。そういう予感を覚える。

「うーん、そうだなあ。君が人間の剣士と戦い終わった後からだね。悪いけど、君のあとをつけさせてもらっていたよ」

ただ、喋るだけなのに汗が噴き出る…ように感じる。実際はカラカラに乾いた骨であるので、心因性のものだろう。

「それで、どういったご用件で？」

声が震えそうになるが、必死でこらえる。

「簡潔に言うと私の質問に答えてほしいということが用件かな?…君は漆黒聖典の一員かい?それとも…」

「プレイヤーかな?」

ドクンと心臓が跳ねる。血圧が上がリ動機とめまいがする。

これら全部の生理現象は自分の体では起きないはずだが、それですむならフロントム・ペインも起こらないだろう。

今、目の前の存在は自分がこの世界にいるはずのないものだど勘づいてる可能性が高い。

嘘をつくか、真実を話すか。選択は揺れる。

息を整える様に呼吸をした後、充分な時間をとって答える

「漆黒聖典というのとはよくわからない…俺はいや、私はあなたの言う通りプレイヤーだ。

それで、なんだ？俺を殺すのか？」

目の前の存在はじーと鈴木悟を眺める。その姿は、獲物を丸のみにする前の蛇にも見えるし、真偽を見定める取調官にも見える。

「別にむやみに殺したりはしないよ。まあ、今後の行動次第だけだね。私はツアインドルクスⅡヴァイシオン。この国の隣国、アーグランド評議国の永久評議員をしているものだよ。まあ、君に接触したのはその仕事とは関係ないんだけどね」

殺しはしないというが、気は抜けない。しかし、逃げられるビジョンが浮かばないし、戦って勝てる予感もしない。結果、黙って相手の言葉を待つ

「君は自分以外のプレイヤーのことは知っているかい？」

「俺の他にプレイヤーがいるのか!!？」

「いるとも…六大神に八欲王、それに十三英雄のあの子は君と同郷さ」

「その人たちのどこにいますか!!？」

冷静さを取り戻してきた鈴木悟は、言葉遣いを正す。

「…本当に何も知らないんだなあ。彼らは600年前に現れたもの。一番最近でも20

0年は昔の話だよ」

「600…200年…」

同郷のプレイヤーはどうやら、いないらしい。危機が遠ざかったとみるべきか、さみしさを感じるべきか。ただ、アインズ・ウール・ゴウンの仲間と会える可能性がまた、低くなったことには落胆を隠せない。

「まあ、これからくるかもしれない。今の君の様にね」

白銀の鎧は、こちらの心境を呼んだのか声色が優しいものなっていた。

「…どうやら、君は大丈夫みたいだし私は帰るよ。何か聞きたいことがあるなら評議国を訪れて来てくれ」

「あ…ああ」

白い鎧が去り、十分な時間が経ってから鈴木悟は、膝から崩れる。

「やつぱ、いたじゃん…強い奴…」

—————

(とんでもない力を感じたんだがなあ)

ツアインドルクスⅡヴァイシオンは白銀の鎧を動かしながら、久々のプレイヤーとの遭遇を振り返っていた。



最初は別の目的で動いていた。それがひと段落つき、自国に帰還している途中のこ  
と。

自分がこの場所で守護するアイテムと同等の気配。何百年も感じなかつた感覚。で  
きれば感じたくなかつた感覚だ。

それを放つのは、黒の剣士。彼からは、とんでもない気配を感じたが、自分の殺気に  
怖じているところをみると実力は高くないらしい。

「100年の揺り返し…今度も平和に終わるといいが…」

白銀の竜王の眩きは誰にも拾われない。大変なことになったが、今動くことは何もな  
い。竜王は静寂に眠った。

## 騎士と姫の日常 ④新春野球大会

## 新春野球大会

「明けましておめでとうございます」

「ああ、今年もよろしくお願ひします」

モモン宅に繋がる鏡から顔を出したカルカとモモンが新年の挨拶を交わす。

初めて言われた時は困惑したが、考えてみれば転移してきたプレイヤーの誰かが広めたのだろう。転移してきたものが風情を持った奴でよかった。モモンはこの挨拶を交わすたびに、先人に礼を言いたくなる。

「大丈夫か？明日は新年のパレードが控えているのだろうか？無理をしていないか？」

「モモンだって、明日は私の警護にあたるじゃない。あたなこそ無理はしていないの？」  
現在は1／1 AM：1：30。鈴木悟達現代人ならまだまだまだ仕事が残っている人間も珍しくない時間帯だ。残☆業しかし、この世界では草木も眠る深夜帯である。

（俺は寝る必要ないし疲労もないからなあ。全然、負担一緒じゃないんだよなあ）

“無理をする”。自分が失って久しい感覚だ。

無理をしていないか？と言うことはよくある。むしろ、モモンにとっては口癖であつ

た。

自分と相手の体力のキャパシティーが違うため、どのくらいで普通の人間が疲れるのか分からないのだ。

しかし、そんな打算ありきの心配ではなく、純粋に心配できるのは優しい人間の証だろう。

「まあ、俺はいいのさ。体力だけが取り柄の男だからな。ところで、相談したいことつて何なんだ？」

そう、今日はカルカが宮廷で新年の式典を終えた後に用事がある。だから、モモンの部屋を訪れるということを知っていたのだが、思い当たる節がないのが疑問であった。

「明日のことになるんですけど、この時期は毎年新年会をひらくじゃない？」

「ああ、あの立食パーティーな」

聖王国には新年会が存在する。しかし、新年会といっても無礼講でやんや騒げと言った代物ではなく、聖王出席のもとに行われる軽いパーティーであった。

それがどうかしたのだろうか？

「毎年、やってるんだけどみんな飽きてると思うし、あの内容では鬱憤を発散できないと思うの…それらを解決できる何かいい案ないかしら？」

「おいおい、新年会って明日だよな？今言うのは遅すぎやしないか？」

「ごめんなさい。やっぱり、年末は忙しくて話を通す暇がなかったの。モモンも忙しそうですね」

「まあ、確かに忙しかった。忙しかったが、こういうのはもっと早くいわないとどうしようもないぞ？」

「うう…ごめんなさい…」

普段はしつかりしているカルカだが相手が自分だと適当な気がするのは気のせいだろうか？とモモンは首を傾げる。小さいころから知っているので父親的庇護欲からすぐに許してしまうのが良くないのだろうか？

「…まあ、ないことはない。その条件をクリアした出し物が。一応、準備しておこう。これからは気をつけろよ」

「わあさすが、モモンね！さすがモモだわ!!」

「さすがモモって何!!」

「流石モモンを略しただけよ。恥ずかしいから、発言を掘り下げないでくれますか？」

「あつ…はい」

「えーこれより、聖王国新年会を開始します。まずは、聖王女様の挨拶です。」

場所は現代で言うところ東京ドームのような場所だ。グラウンドには男女が20名ほど、ただっ広い観客席にはそれなりの人数がいる。

そんな、広い球場に響き渡る司会の声。これは地声では勿論なく、音を拡張させる魔法道具を使用している。

司会のアナウンスに従い、聖王女カルカが台場上がる。グラウンドで整列していた屈強なものたち、観客席のものたち、全員がそれに合わせて頭を垂れる。

「今回は、お忙しいなか集まっていたいただき誠にありがとうございます。それでは、第一回新春やきゆう大会の開催をここに宣言します。」

カルカが言い終わるやいなや、会場が拍手と歓声に包まれる。それはいつまでも終わらないようにも思えたが、カルカが台をおりモモンが姿を表すと元の静寂が帰ってくる。

皆、真剣なのだ。モモンが今から話す内容は、今回の大会の根幹に関わる重要なことなのだから。

「えー、ご紹介にあずかりましたモモンです。これより野球のルール説明を行います。まずはお手元の資料をご覧ください」

そうルール説明だ。カルカの依頼を受けたモモンは野球大会を立案し動いた。それでなんとか当日に間に合わせたのだが、急な変更だったため、参加者はまだルールを理

解していないのだ。聖王女の前で不甲斐ない姿は見せられない。一部のものからは殺気に似た真剣さも漂っていた。

「モモン殿！バットは使い慣れた武器でもよろしいのか？」

「ダメです」

「バッターがキャッチャーを攻撃または、ピッチャーがバッターを攻撃するのはいいのか？」

「ダメです」

ルール説明以前の質問が飛ぶ中一同（一人を除き）はある程度のルールを理解し自らのチームに戻っていった。

「ケラルトさん。よくこのチーム案通りましたね。」

モモンは自らのチームベンチにいたケラルトに声を掛ける。ちなみにどうでもいいがこの野球大会の参加者はモモンが用意したユニフォームに着替えている。どうでもいいが、ケラルトは普段ゆつたりめの神官の服装を着ていて目立たないが、この世界でも上位のスタイルの持ち主だったりする、どうでもいいが。いつもは下げている髪の毛をポニーテールで結ぶ姿は普段とのギャップでかなりくるものがあるという参加者は少なくない。

どうでもいいが。

モモンや他数名はケラルトの普段の腹黒さを身をもって体感しているので、そういった感想を抱く対象にみれなかつたりするが。

それは、さておきモモンは手にしていたチーム割り振りを指し、ケラルトに問う。

赤チーム

カルカ

モモン

ケラルト

オルランド

以下オルランドの部下

白チーム

レメディオス

イサンドロ

グスターボ

アントニオ

ネイア

以下その他聖騎士

まず、カルカが選手として出場するのも驚きだが、そのチームに対抗するチームのリーダーはレメディオスなのである。

普通のレメディオスなら、カルカと同じでないとこねるだろうにどんな手を使ったんだ…

「あら、それは簡単なことですよ」

ケラルトは不思議そうにするモモンにふっふっふつと悪い笑みで言う。

多分、彼女としては普通に笑っているつもりなんだろうが背筋が凍るくらい嫌な予感を感じさせる笑みだ。

「モモンさんがいるからですよ。姉様はあなたをライバルに認定してますからね。気を抜いていたら今回の大会…足元をすくわれるかも…ですよ？」

「はっはっはっ、それは怖い。私も全力で大会に臨みましょう」

正直、なぜレメディオスに敵対心を燃やされているのか、はつきりわからなかったがとりあえず話を合わせる。人はこうして大人になっていくのだ。

「それともうひとつ、聞きたかったんですが、私は自分のチームにパベルさんも誘ったんですが彼は参加していないどころか。彼の娘さんが参加してませんか？しかも、レメディオ



オスチームに」

モモンの疑問を聞いたケラルトが笑みを深める。

「そこが、今回姉さまが本気である所以ですよ、モモンさん。事前にグスターボに相談してこちらの戦力を削ぎにきています」

「ああなるほど……これはこちらも気合を入れなければなりませんね」

これも、分からないが知ったかぶりをしておく。あまり、無知を晒したくないという強がりだがケラルトが「これくらい当たり前前に察せられるよな？」というスタンスで喋るので聞き直しづらいのだ。

ちなみに、レメディオス（作グスターボ）の策は、パベルは娘を溺愛していることを裏手に取り自分のチームにネイアをいれることで、娘との敵対を恐れたパベルの参加を阻止する狙いがある。

「これだけで、話を通じると説明が楽でいいですね。姉さまにオセロを教えるのとは凄いい違いです」

「…まだ、根にもつてるんですか？もう、許してくださいよ。神殿に魔法道具の素材も納入したじゃないですか」

「別に許しますよ。分かりやすい例として挙げただけです。」

「意地悪な人だなあ」

まったく。といったジエスチャーをとり、相手チームのベンチを見る。レメディオスと目が合った気がした。しかし、そこから恋が始まるような甘い瞳ではなく、その目には闘志の業火が轟轟と燃えている気がしてならなかった。

色々な思惑が交差する試合が始まる。

先攻カルカ聖女王ベイスターズ

後攻レメディオス聖騎士ファイターズ

という文字が書かれた巨大なプラカードが掲げられる。

ちなみに、モモンはこのチーム名で二回はつつこみを入れた。考えたやつは22世紀からインスピレーションを感じたのだろうか？

ピッチャーはレメディオス。バッターはオルランド部下A。

(まあ、お手並み拝見だな)

レメディオスをピッチャーに据えるのはいい考えとは言えない。バッターであればその持ち前の身体能力で無双できるだろうが、意外とピッチャーは頭を使う。レメディオスがその複雑な駆け引きをできるかどうかだが…

これが、レメディオスのわがままなら分かるが今回のレメディオスは本気も本気。グスターボが采配したはずだがどういった意図があるのだろうか？

レメディオスの初球。

投げたと思つたら既にキャッチャーのミットに収まっていた。

オルランド部下Aは後に語る。「ボールが消えるなんて話じやない。リリースポイントすら確認できない速さ」と。

なるほど！とモモンは合点行く。

頭を使うことがピッチャーとしての難関であるのなら、頭を使わないように投げればいいのだ。あの超剛速球は勘で打てるような甘いものではない。

一部の實力者であれば対等の勝負が出来るが、オルランドの部下や肉体面で強さはないケラルトなどの神官、カルカなどは打つのは厳しい展開だろう。

(これは…オルランドか俺がホームラン打つしか勝ち筋がないぞ…まいったな)

どうせやるなら勝ちたい。というか、ドヤ顔をこちらに向けてくるレメディオスに負けたくない。

(次のバッターはケラルトか…仕方ないが1回表の得点はあきらめよう)

「おい！ケラルト!!それは卑怯だぞ!!」

諦観していたモモンの耳にレメディオスの上ずった声が入ってくる。

見るとバッターボックスには炎の上位天使。炎の剣の代わりにバットを持っているのがひどくひようきんに見える。

「あらあら、姉さま。別にルールを違反してはいないでしょう？ねえ、審判？」

審判たちも合議するが、確かにルールを違反してはいないという事でケラルトの作戦が通る。さすが、聖王国一の悪女。悪だくみのキレが違う。

(※実際の野球のルールでも違反です)

「ふん！お前がそういう手を使っても私の球は打てないに決まってる！」

実際、炎の上位天使は第三位階魔法で召喚されたものなので大した実力はない。頑丈さで言えば、なかなかなものだが戦力という意味ではオルランドの部下より少し強いくらいだろう。

レメディオスの球に反応できるのか？そもそもできたとしても、その球を打てるほどの耐久性はあるのか？ということになるが、ケラルトがそんなことも考えずに試合に臨むとは思えない。今も口が張り裂けんばかりの邪悪な笑みだ。

レメディオスの一投目。炎の上位天使（ケラルト）はこれを見送る。さらに、二投目も見送り。

自らの球に手も足もでないか。そういわんばかりのレメディオス。しかし、ケラルトの笑みも同じように深くなる。どちらも勝利を確信した笑みをうかべるといふ稀有な状況。

そして、運命の三球目。レメディオスは、その性格の雑さに似合わず正確な投球を行

う。

それに殺人的なスピードが乗っているのだ。普通の人間なら恐ろしくて、手を出すのを躊躇ってしまっただろう。ただの余興だったはずが…恐ろしい催し物になってしまっている。

緊迫の状況に誰もが唾をのむ。モモンは、あつれく？もつと、わいわいする予定だったはずなんだけどなあ？と首を傾げる。

轟音が鳴り響く。最初は、何の音だったのか判別できなかった。しかし、それは少しダメージ判定の入った炎の上位天使の両腕を見れば一目瞭然であった。

「そつちにいったぞ!!」

ボールはかなりのスピードで飛ぶ。途中でバウンドするが、まるでボールが勢いを収まることを拒否してるかの様に跳ねる。

レメイディオスの怒号が飛び、ボールはレフトを守備していたネイア・バラハに向かう。ネイア・バラハは非常に後悔していた。

呼び出しは急であった。聖騎士団団長から直々に来るように言われた。

ネイアにはそんな人物に呼ばれるような功績も失敗もないので、父親に関することだろうと初めから心のどこかで思っていたし、パベル・バラハの娘としてしか見られていないことに少しがっかりもしていた。

しかし、団長の話によるとどうやら私本人が必要という事らしい。その時の返事は一つしかなかった。

「はい！やらせていただきます!!!」

その時は、聖王国の聖騎士を直指してよかったと思つたし、もつと頑張ろうと思つた。今は、激しく後悔していたが。

（これ、取れるわけないよね？取つても軽傷じゃ済まないし、取れなくても後で団長に殺される…）

ネイアの脳裏に走馬燈が流れ始めたが、それはOPで止まることになる。

身構えるネイアとボールの間に入りボールを止める人物がいたので。

「団長も見習い相手に厳しすぎる…こんなの取れるわけないでしょうに…」

セカンドの守備についていたイサンドロ・サンチェスである。

彼はボソボソ言いながら、はきはきとしないその外見とは似合わない豪肩でファーストに投球を行う。

「あ…ありがとうございます。」

ネイアは、聖騎士副団長の肩書きをもつ男の登場に恐縮としながらもイサンドロに頭を下げる。

「別に気にしないでくれ…あんなものをとれるのは聖騎士でも数えられるくらいしかい

ない…それにこの試合…君は棄権した方がいい…」

「それは、私が役立たずということでしょうか？」

ネイアは自分が不甲斐ないと言われたような気がしてシユンとする。

実はこの表情はイサンドロから見ても、睨みつけるように見えていたため、「パベルさんの娘さん…親にそっくりですね…」と後にモモンにこぼすことになるがそれは別の話。

「いや…このままやったら命の保証が出来ないという点ではそうだが…このままだと、むしろ君より私達の方が先に死ぬことになってしまいそうで…」

イサンドロがネイアから視線を逸らし、観客席を見る。それは、あちらを見ろというイサンドロの指示なのだろうということで、そこを見ると…

修羅がいた。

感情がすべて抜け落ちた…しかし、目は見開いている。そんな父の姿があった。隣では母が必死にパベルを抑えている様に見えるが、すでに半身がグラウンド側に入ろうとしている。

父は瞳孔が開き、どう見ても正常じゃない。

「れ・レメ…レメディオス・カストディオオおお!!!」

「こ、この俺が妻と共にいい育て上げたあ!!!ネ、ネイアを駒の様に使いい!!!さ、さ

らにはあああ、命の危険に晒そうとすうう!!!許せるものかああああ!!!」

パベルが観客席からグラウンドに乱入し、レメデイオスに殴りかかろうと距離を詰める。

人類トップクラスの二人のぶつかり合いである。止める間もなく死合に発展し、止めることができなくなる。唯一止められるであろうものたちは…

・モモン

「モモンの旦那!!! 離してくれ!!! 俺も、俺もあの殴り合いに参加してえ!!!」

「馬鹿野郎!! これ以上騒ぎを大きくしようとするな!!」

モモン|| オルランドの足止めにより、介入不可能。

・カルカ

「これは、私が強権を発動させるのは傲慢じゃないかしら…別に武器はないから死にはしないはずだし…事後で遺恨をのこさないように動くようにするのがベストね!!」

カルカ|| 今は殴らせて、後で解決するという方針を決定。介入拒否。

ちなみに、カルカもケラルトと同じくモモンの用意したユニフォームを着用している。どうでもいいが (ry

・ケラルト

(私が姉さまの球を打つたことがなかったことになっている空気になってるですが…)

わざわざ、監視の権天使も事前に召喚し炎の上位天使にバフをかけつつ、レメデイオ



スの投球に合わせてバットを当てるだけに徹した。その結果、勝ちとつた打球が見事にノーコンテストにされている空気。

作戦がうまくいき、必死に一塁まで走つたのにまるで馬鹿みたいだ。ケラルトは不貞腐れた。

ケラルトはやる気をなくしたので介入拒否。

結局、イサンドロにグスターボがレメディオスをパベルの妻とケラルトの召喚した天使（カルカに言われて渋々、召喚した）がパベルを取り押さえ事態は収束した。

勿論、野球大会はお流れになり、後日にピンポン大会を開催。グスターボが優勝するという意外な結果を残しつつもこちらは平和に終了した。